THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, Inc.

ELEC BULLETIN

No. 13 February 1965

巻頭言 先生と生徒……清水 護 1

〈**特集**〉 日本の英語教育に望むこと

1．提言……佐藤喜一郎，坂西志保，沢畑泰二，宇佐美 洵 2
難波勝二，石橋幸太郎，服部四郎，中島文雄
粕谷よし，鹿住菊太郎，福原麟太郎，上代たの
竹内俊一，市河三喜，斎藤 勇，松本重治
岩崎民平，太田 朗，岩佐凱実，酒井杏之助
村岡花子，黒田 巍，高橋源次

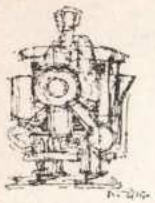
2．座談会……22

日英両語音声の比較（2）……国広哲弥 26

外国語としての英語教育……松下幸夫 30

ELEC Institute Instructor の横顔…… 35

GAKKEN



先 生 と 生 徒

清　水　　護

第1回の ELEC Summer Seminar の総指揮者は Dr. Twaddell であった。博士は元来ドイツ語専門の外国語教授者であるが，外国語としての英語教授法研究の consultant として，まことに深い印象を残した人である。この講習会中の一日，Practice Teaching の時間を参観していると，同教授は，「ドイツ語の初学者には，わたしはこういうようにして教える」と言って朗々たる豊かな音声で，左手の掌を右手のこぶしで強く打ちながら，三拍子で［vóː vóːnən zíː］（Wo wohnen Sie?（＝Where do you live?））と二三度くり返して自らモデルを示された。目がさめるようなその迫力！今もなおその時の聴覚像はあざやかに胸に刻まれている。

これにつけて思うのであるが，はじめて英語を中学一年生に教えるとき，先生としてはあたかも白紙に揮毫するようなスリルを覚えるのではなかろうか。一般的に言って，中学一年生は目を輝かせて英語の授業に期待をかけていると思う。この時に正確な聴覚像を刻みこむのは，先生として当然努力すべきことであるが，Twaddell 先生のような大先生は別として，普通の日本人先生としては，外国語の発音に関しては上達の限界があり，native speaker と同じように発音できなければならぬということはないのである。人それぞれお国なまりをまじえても英語として立派に通じることは，著名なアメリカの大学で講義をしておられる米人以外の名教授の発音を聞けば肯けるところである。しかし今日の英語教育としては，読解力とともに，聴解力や発音の面も充分重んずべきは申すまでもないことで，テレビやレコード，あるいはテープの普及により，モデルとして充分な英語を聞く機会が，どこに居ても自由に得られるようになったことはまことに幸である。学校では Language Laboratory の設置を急ぐところも多い。又プログラム学習の研究も進み，機械力の応用がますます教室での授業に大きな役割を演ずるようになってきたのは，一面喜ぶべき現象であるが，その利用法が適当でないと，案外効果は少ないかも知れない。ことに低学年の時には英語音と日本語音との違いをテープを聞いただけで区別することは，学習者だけでは甚だ困難であろう。やはり人間が，即ち生きた先生がモデルを参考に，自分の声の一息の一赤インクで直接直してやるのでなくては，ほんとうの効果は上らないように思う。結局機械を利用するにしても，教育は先生の人柄と生徒の心との触れ合いによってはじめて生きるのだと思われる。

今の時代にこんな話は通用しないかも知れないが，今では名門校として不動の地盤を持っている某校が，開校間もないころ，英語専門の先生はたった一人で，あとはいわゆる素人が兼任していたそうである。その中のある先生は，授業中に時々思いがけない質問が出て，解決に窮したときには，「今日はU先生が見えておられるから，聞いて来ます」といってこの大先生に相談に行き，解決がつくと又教室に戻り，「こうだそうだ」と説明して授業を続けたという。しかもそのためその後の授業が乱れることはすこしもなく，そのクラスからは多くの人材が輩出していると聞く。これはその先生の日常の謙虚と誠実さに対する生徒の信頼感が然らしめたもので，機械化しようとする今日の教育について考えさせられる逸話である。

（国際基督教大学教授・ELEC 理事）

特 集 I

提 言

日本の英語教育に望むこと

財団法人英語教育協議会の理事および評議員の方々から表題によるご意見をお寄せいただき，特集としました。日本の英語教育の前進の糧となることを念願します。

（配列は原稿到着順による）

耳 の 修 練

佐藤喜一郎

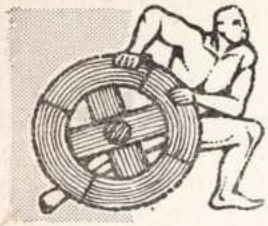
日本人は例外もあるが概して外国語に弱いといわれている様である。しかし読むことなら五十の手習いでも勉強如何では相当行けるし，読みこなせる様になれば自然書くこともさまで困難ではない筈である。外国の文献研究ではさまで弱くはない。

問題は話すことと聴くことである。私達は戦前中学や高校で漢文を随分時間をかけて習ったものである。所が漢文に返り点などつけて全く日本語風に消化して了ったので漢文の意味は理解するがその文章を中国人がどう発音しているかは全然教えなかった。実際は漢文の先生もそれを知らなかったのである。現に中国人の名刺を貰ってその漢字は知っていてもどう発音するか多くの場合わからないのである。私は上海である英人が漢文がわかるといっていたがその人は全く中国人が読む様に棒読みして理解しているので日本の漢文の教え方について考えさせられたのを覚えている。昔の英語教育は幾分この流儀であったために中年以上の人が苦労している訳である。

結局会話になると耳の問題という多少先天的の条件が加わって来る。私の友人に Voss という人があるが，ある日本人が V を B マガイに発音すると本人は自分の事でないと思って返事をしないのを見た事がある。日本人の耳には L と R，V と B などの区別がハッキリしていないから自然正確な発音をする様にならない。私なども話す事柄の前後関係から Base だか Vase だかを判断しているのが羞かしいが事実である。所謂 Intonation の方も会話には大事な事でこれが見当外れであると相手が仲々わかって呉れないことが多い。地名でフィラデルフィヤなど顕著な例である。しかしこれは約束事なので克服することはさまで困難ではない様に思われる。

一番私が六ヶ敷いと思う事は相手の話を完全に把握する事である。英語であれ何語であれ自分の外国語が役に立っているかいないかの岐路は，hearing であるといっても過言でないと私は思っている。世間にはヨク外国人のいう事は解釈出来るがこちらが発言する方が六ヶ敷いという人があるが，私はむしろ反対である。これが耳が最も大きな役割をする部門で若い時から習った人でないと習熟しない点である。私は昔私の 7，8 才の子供がラジオの寄席で万才式の話を私より遙かによく聞き取って面白がっていたのを経験しているのである。外人同志の話を傍で聴いてわかる様になるのは大変であることは私の実感である。

扨以上は私が比較的年をとってから初めた英語に対する苦労の体験を述べたものである。子供のときから習った日本語に，話すのはやさしいが聞くのは六ヶ敷いなどという苦労はないのである。近頃英語に関する限り若い人が皆上手に話せる様になったと感じる。恐らくこの人達の hearing もよくなっているのであろう。結局若い間に即ち耳の修練が出来る間に語学というものは習うことが先



決の様である。私の体験など時代遅れであるかも知れないし又そうなる様な英語教育を希望してやまないものである。

（三井銀行会長・ELEC 評議員）

生きた英語

坂西　志保

生きた英語を教えるべきだとよくいわれている。役に立つ英語教育をということなのであろうが，これには英文学者などから抗議が出ている。品の悪い，実用的な英語を連想するからであろう。

外人相手の商店街などでできく英語は，用を弁ずるが，それ以上の何物でもない。聞いていて恥かしい思いをする。こんな英語を教えられたらたまらない。

私たちが生きた英語という時には，最早人間社会に通用しないラテン語，いわゆる死んだ言葉と対比していっているのだと思う。ラテン語は，一応文法を習得し，その法則に従って勉強する。しかも，書いた文書だけであるから，読むだけで，その他のことはみんな抄略してよい。ところが，現在広範囲に使用されている言語は，文法一筋縄ではいかない。話す能力や聞く訓練などから始まって一つのことをいうにもいろいろの表現の仕方があり，そのニュアンスを判別する能力も要求されることになる。それを要求されても，死んだ英語の教授法だけ身につけた先生では無理であろう。

一昨年11月号の『三田評論』に，慶応義塾の清岡英一氏が「高校中学英語教員のハワイ留学」と題して，義塾の全英語教員を再教育する計画が実現したのを報じている。これはハワイのイースト・ウェスト・センターという，東西文化研究所の好意によるもので，一昨昨年から毎年，6～10名の教師を一年間，留学させている。留学生は授業料，宿舎費，書籍購入費，往復渡航費など，一人あたり約五千ドルになるという。すばらしい留学である。

清岡氏によると，義塾の先生たちは入学にあたり，英語講習所で試験をうけたが，全員とも補習を要求された。そして，単文の発音練習や初歩的会話が中心となっている補習コースが始まった。〝先生たちもウンザリされたことと思うが〟と氏は書いているが，実は，この苦い経験はかえってしあわせであったといいたい。専門科目も大切であるが，生きた英語を教えなければならぬ先生たちは，発音の練習と矯正，聴き取り訓練など，重要なのである。長年教職にあって，そんな初歩的なことにもう一度，外国で苦労しなければならないのは幸いであろうが，初心に帰ることが大切なのである。幼児のようにならなければ，天国に入ることができない，と聖書にあるが，よい語学の先生になるためには，幼児のような気持にならなければならない。

英語の先生が留学するのであったら，謙虚にこの気持をもつことで，そうでなければ英語についての知識を獲得するかも知れないが，よい教師となって帰国するとは限らない。外国に長くいて，英語をマスターした人が，よい語学の先生となるとは限らない。完全に話すことができたって，先生としては落第かも知れない。教えるという技術は，特殊な能力を必要とするのである。

それにつけても，この一，二年，英語に強くなる方法を書いた本がたくさん刊行されたが，その中にベスト・セラーになったもので奇異な表現やスラングをこなすのを主にしているものがあって，驚いた。日本にはまだ，言葉をマスコミの道具と考えるより，一種の装身具のように考えているのではないかと思う。自然な，すなおな方法で，相手に自分の考えを伝達できればよいので，外国人がスラングを上手に使用したって，かえって野暮くさく，田舎者という印象を与えるだけである。やたらに難かしい言葉を使用したがるのも日本人である。しかも，そのような言葉の真の意味や使い方を知らないので，物笑いになる。外語学に関する限り，スマートになろうとしたり，学をてらう必要はない。平易な表現で，自分の意志を正確に相手に伝え，

また相手のいうことを間違いなく理解する能力が望ましい。そして，私は，英語教育にそのようなことを期待しているのである。

（評論家・ELEC 評議員）

話せる英語を!!

沢畑　泰二

「中学，高校，大学とあれだけ苦しんだ英語が外国に出てみると，さっぱり通じない。」「女学校であれだけ勉強した英語が卒業してみると，かん詰のレッテルを読む役にも立っていない。」「日本の学生は比較的難しい英書でも読みこなすにもかかわらず，簡単な会話も出来ない。」等々，戦後外国人，特に英語国民との接触の機会が多くなるにつれて過去の日本の英語教育に対する批判，議論は活発である。維新で欧米の文化に驚嘆し，短日月にこれに追いつくことを至上の目的とした日本が，外国語教育に於いて，読書力に重点を置き，不本意乍ら音声を軽視する結果になったのは自然の勢であったろうし，「外国文化を早急に吸収し，これに追いつく」という意味では一応の成功を収めた……とも言えよう。

同様に「話せぬ英語」に対する戦後の批判も当然の帰結である。「実用価値を軽視する過去の英語教育には賛成出来ぬ。」「教養価値にこそ，より大きな意義を認めるべきだ。」「実用価値，教養価値と区別することにすでに誤りがある。」等議論は多いが，たとえ最終の目的が読書力の養成にあったにしても，言語の一次的表現である音声を軽視する英語学習は誤りであろうし，「話せない英語」を教えることは教育の名に値しまい。書物という媒体を通して，間接的に外国文化を吸収する一方交通の時代は日本にとって過去のものであり，「翻訳だけが全手段」の時代は既に過ぎたのである。「話せる英語を」……の要求は時代の声であり，英語教育本来の姿への希求である。勿論解決されねばならぬ問題は多く道は険しかろう。現在教壇に立つ英語教師の多くは，例外はあったにしても，音声を二次的に考えた戦前或は戦争直後の教育を受けたものであり，したがって音声に自信を持つ者は少いのではあるまいか。「話せぬ教師」に「話せる英語」を期待することは愚である。これ等教師に再教育の場，それも外人教師による研修の場を提供することは彼等にとって福音ではあるまいか。特に意欲はありながら機会に恵まれない地方の教師にとってその喜びは大きいのではなかろうか。

教師自身の英語力の問題を別にしても，教育課程再検討の問題，教師の受け持ち時数の問題，生徒の授業時数（英語の）の問題，英語学習開始年齢の問題，能力差（特に義務教育に於ける）の問題等々，研究，究明すべき問題は多く，今後の努力が望まれる。急速に狭くなりつつある世界の中では，日本をもはや島国と理解すべきではなく，世界に占めるその比重の増大とともに，相互理解の最高の良器である外国語，特に英語学習の将来には期待するところ大なるものがある。

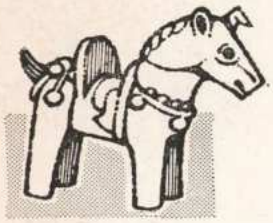
（東京都港区立愛宕中学校長・ELEC 評議員）

英語教育に望む三点

宇佐美　洵

戦後，日本の教育はいろいろの面で，大きな変革と発展をとげたが，とりわけ英語教育の分野において著しかった。戦前の読書力偏重の英語から，会話能力重視の英語に発展したことなどは，その最も大きな変化であると思う。

この結果，最近では英語を話せる国民が飛躍的に増加し，



又そのレベルも格段に上昇したのである。これは真に喜ばしいことであり，英語教育に携って来られた関係者の努力を多とするものである。

周知の通り，わが国はいわゆる開放経済に移行し，諸外国との交流が一層頻繁になりつつある。従って英語教育の重要性は従来にもまして大きくなっているのであるが，私は今後の英語教育について，特に次の三点を望みたいと思う。

まず第一に，英語教育を通じて世界を知り，日本を知ることが大切だということである。日本の英語教育の歴史をふりかえると，ある時は欧米文化の盲目的な輸入の手段であったり，或はたんに入学試験を通るための方便になるなど，教育の理念から逸脱したことが少くなかったように思われる。しかし，欧米文化の盲目的な輸入の時期は既に終ったと思われるし，受験英語の弊害もつとに理解されている。

従って，今後の英語教育に当っては，英語を通じて世界を知ること，或は英語を通じて外国人のものの考え方を学ぶことが大切だと思う。こうして外国を知ることが，ひいては日本をより深く理解することにもなるのである。世界の中における日本の地位を高めるには，外国語の学修に止まらない，積極的な心構えが必要だと思う。

第二に望みたいことは，英語教育を通ずる人格の陶冶である。

およそ教育，特に実務教育には，技術の取得とそれを通ずる人格の形成の二つの目的があるように思われる。最近の英語教育は，過去の反動といえば言い過ぎであろうが，技術の取得の方にやや重点がかかり，人格形成に対する配慮が若干足りない傾きがあるように思われる。いかほど英会話が堪能でも，その人の人格がこれに伴わなければ，「仏作って魂入れず」に等しいわけである。

今後，わが国が経済，外交，文化などの各方面で，先進国と対等に互して行くためには，単に英語が話せるということに止まらず，優れた教養と高い見識を具えた立派な国際人であることが不可欠の要請である。この意味からも，英語教育を通ずる人格の陶冶に，もっと多くの関心を払うべきだと思う。

最後に第三として最も心要なことは，英語教育で日本人の国際競争力をつけることである。

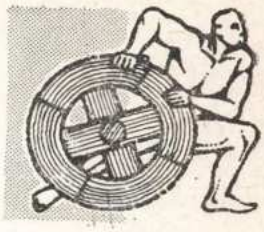
現在，国をあげて国際競争力の強化ということがいわれている。これは一般には，設備をよくし，或は近代化を図るということで，莫大な資金を要すると考えられ易いのである。しかし，英語を自由に話せる人間をつくることが，非常に日本の国際競争力をつけることになることが見落されている。極端にいえば，英語教育によって人間の国際競争力をつけることが，いちばん大切なことだと思う。而もこれは，最も金のかからない国際競争力強化の方法ではないかと思う。

（日本銀行総裁・ELEC 評議員）

耳と口による指導

難波　勝二

わが国もいよいよ，開放経済体制という新しい時代に入った今日，どんな仕事に従事するものも，外国語の素養を十分身につけることの必要性は，一段高まったわけであるが，日常学生に接触しているものとして，学生の英語の力が，一般的にいって，はなはだ不十分であることを，感じているものである。もちろん中には，高校時代に十分学ぶ機会がなかったというものもあるが，きわめて不完全な授業をうけたにすぎないとおもわれるものもあり，概して満足な



授業をうけているものばかりとは，言いえない実情にある。

たとえば，発音にしても，まったく自己流の発音で読むものもあり，その誤りを指摘しても，容易に改まらないことからみても，自己流の発音で，固まってしまっているといって，過言でない。

さてこのような欠陥を改めるためには，いろいろ改善されねばならない点があるとおもわれるが，二，三希望を述べてみれば，

1. いわゆる外国書講読の時間には，ある外国書について，主としてその意味を理解し，読書力を養成することに，重点がおかれているから，自然発音やききとり方などの練習には，役立っていない。しかし今後は，このような目を使って読書力を養うことのほか，もっぱら耳や口を使って，聞くことも話すこともできるような勉強を行なうことは，単に読書力ばかりでなく，語学力を向上させるため，考慮されるべきことであろう。

このように読書力をつけることと，正しい発音やききとり方を学ぶこととは，両立困難であり，もし後者に力をいれるならば，前者の力のつき方がおそくなって，両立は到底困難であるとの批判が生れるであろうが，従来のような読むこと一方の教育のやり方は，実力養成の上からいって，改められることが望ましい。

2. 正しい発音やききとり方の練習のためには，きわめて初歩的なテキストに，よらねばならないであろうし，これと読書力養成のためのテキストとのあいだには，内容の上からいって，かなりの格差があり，この点も両立を困難とする理由となろうが，つとめて両立をはかろうとする以上，この辺の支障は，当然克服しなければならないことである。

3. 従来の教育方針は，十年一日のごとく，読書すなわち読んで訳をつけるという目による勉強一方であった。今後口や耳による教授法をあわせ行なうとすれば，どうしても初歩の時代に，十分その要請にこたえるような教育の養成が必要となる。

中学の英語教育にあたって，上述の目的を達成しうるような実力のある教員によって，若いものが指導をうけうるならば，日本人の英語の力も，いっそう向上するものとおもう。

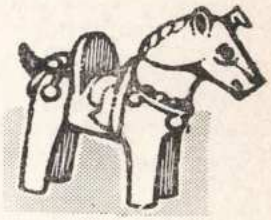
（東洋大学教授・ELEC 監事）

自主性の確立を望む

石橋幸太郎

日本の英語教育に対する希望を述べるにあたり，まず最初に，はっきり述べておきたいことは，今日までわが国の英語教育が歩いてきた道は，たとえ，どのような欠点があったにもせよ，厳然たる事実である以上，それはそれとして肯定されねばならない，ということである。よかれ，あしかれ，われわれは，過去を前提とし，過去を足場として，出発するより仕方はないのである。「よかれ」「あしかれ」といったが，実際，わが国の百年に近い英語教育の歴史を顧ると，間違ったこともあったが，大方針に狂いはなかった。間違ったことと言うのも，実は，今日の立場からみての話であって，当時としては，決して間違ってはいなかったのである。そうせざるをえなかったから，そうしたまでである。たとえば，話しことばが，おろそかにされて，書きことば中心になったこと，そのことは，たしかに邪道であったが，当時の日本の社会的ないし国際的情勢からみれば，それは必要悪であったのである。何はおいても，条約改正を行なわねばならない，そのためには，たとえ外見だけでも，西洋なみになること，これが，当時の日本としては絶対に必要なことであった。

西洋の文明を吸収するためには，内容が読みとれればよいのであって，発音に苦労している余裕はなかったのである。それに，陸つづき，ないし，一衣帯水の間にある西洋諸国とはちがって，英語民族との直接の接触も，きわめて少なかった時代のこととて，話しことばの必要を感ずるこ



とも少なく，話しことばを練習する機会にも恵まれなかったのである。

上に述べたことは，言語学習の原則からいえば間違っているが，日本の特殊事情からみれば必然性をもっていたことの例である。これと反対に，明治時代からの方針で，いまなお正しいと思われることは，普通教育としての英語科究極のねらいを読書力の養成においたことである。ただし，それが従来のように，話しことばの訓練をぬきにして，もっぱら書きことばの練習をやるというのでは，前節で述べたとおり，言語学習の原則に反することになり効果はあがらない。話しことばの訓練を無視しては，フリーズも言うように，読書力の養成は，とうてい，おぼつかないのである。

以上述べたような過去の事実を正しく認識したうえで，その欠点を修正し，長所を助長するようにすることが肝要である。そうしてこそ，われわれの努力も地についたものとなり，堅実な発展に資することができるというものである。そういう立場から，将来に対する希望をただ一つだけあげるとすれば，それは『自主性の確立』ということである。

自主性を確立するためには，まず，自分の仕事に自信をもたねばならない。そして，自信をもつためには，もちろん，実力がなければならないが，しかし，いくら実力があっても，自恃心のない人は，実力だけの効果をあげえないであろう。

自信の問題は，個人のこともさることながら，日本の英語教育全体についても，われわれ当事者が自信をもつともたないとでは，大きな違いがある。それなら，日本の英語教育について自信をもってよいであろうか。わたしは，もってよいと思う。実際，わが国の英語教育は，欧米諸国の外国語教育に比べて，決して遜色はないと信ずる。日本ほど，国をあげて英語教育に力を入れているところは少いのではないか。教授技術の研究についても，したがってまた，その成果についても，平均して，どの国にも劣らないと言っても決して自画自讃ではないであろう。

外部からの批判に，あわてふためいたり，何でも新しいものには無批判に飛びつくというのは，自信のない証拠である。

しかし，頑固や独善に陥らぬよう，世の批判には虚心に耳を傾け，新しい動向には注意を怠ってはならない。ただ，それを取るか捨てるかは，各人の冷静な判断に従うことが肝要である。

（日本大学教授・ELEC 理事）

わが国における英語教育の改革

服部　四郎

理論的に言えば，文字言語は，音声言語とは独立に伝達の手段としての機能を果たし得るものであるから，音声言語とは独立に習得され得るものである。しかしながら，漢文のようにそれの基礎となった音声言語が現在は話されていない文字言語の例を除けば，現代の，特に西洋諸国に行われる文字言語は，それぞれの国において，それに近似した音声言語を基礎として習得されるのだし，また，それに依存しつつ伝達の機能を果たしつつある面もあるのだから，外国人がそれを習う場合にもその国の人々が習うのと同じようにこれを習得するのが理想である。即ち，音声言語と関係なく文字言語を習うようなことをせずに，音声言語の基礎の上に文字言語を習得する注p.21のが理想である。またそうするのが多くの場合能率的でもあるようである。

それのみならず，ことに第二次大戦後は，われわれ日本人も西洋人その他と直接交渉する機会が急に多くなってきたので，彼らのことばを自由に話せる方が有利であることがわかり，英語について見ても，その教授法を訳読法から Oral Approach へと改革する必要が唱えられつつある。ここでは，そういう改革が可能であるか否か，可能であるとすればどういう道を進むべきか，について，簡単に私見を述べたい。

日本人は，特に明治以降，西洋文明の優秀さを認め，これを輸入することに全力を挙げ，その手段として英語その他の西洋語の教育を盛んにする必要に迫られ，それを実行してきたが，大勢から見て，その教授法は読み書き，特に読むことに熟達するためのものだった。そしてそれは，書物を通じて西洋文明を輸入するためには，合目的的だったのである。そこで，教科書でも参考書でも，その目的に適うようにできており，教師もそういう教授法を採るように

訓練された。さらにそれに拍車をかけたのは，高等学校や大学の入学試験である。英文和訳（とそれに附随して和文英訳）が課せられ，それに良い点数をとる技術が研究された。Dictation の試験もあったが，普通の会話には現われないよなのろい速度で，ゆっくり一語一語読むのを書きとるわけで，その目的は，綴りを正しくおぼえているか否かを試すことにあったから，今でいう hearing の練習にはならなかった。高等学校・高等師範学校や大学の入学試験に合格することは決定的に重要だったから，大部分の体制はその目的に適うように整備された。そこで，わが国の英語教育に重要な役割を演ずる中学校の先生たちは，読み書きはできても会話は自由でないのが普通だということになった。そして，授業の大部分の時間は訳読のために使われた。私など英語は大好きで，試験の成績はいつもよかったが，大学を卒業したころは，本はかなり読めても会話はまともにできない状態だった。私たちと同年配の者は，一般にそういう状態だったと思う。

ところが，第二次大戦後は，様子が大きく変化した。外国人，特にアメリカ人が日本に沢山やって来たし，ラジオ，テレビ，テープレコーダーなどが発達したので，native speaker の英語を聞く機会が多くなった。それのみならず，外国人との口頭の直接交渉を必要とする人々の数が著しくふえてきた。そこで，それに呼応して，英語教授法の改革が唱えられ，ELEC などのように，Oral Approach を採用し，その普及に努める機関も現われるに至った。そして，その普及のためには，特に中学校・高等学校における英語教授法の改革の必要が説かれている。

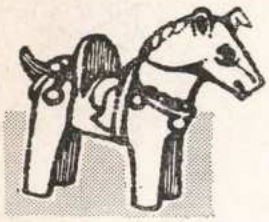
しかしながら，少し考えればわかるように，わが国の中学校・高等学校等における英語教授法を訳読法から Oral Approach に切り換えることは，明治以来確立した極めて強固な伝統を根底からくつがえす，言わば一種の革命にも等しい仕事で，一朝一夕に成るものでないことは，明らかである。それには，まず中学校・高等学校の英語の先生が皆会話が自由になることが望ましい。教科書・参考書も改めなければならないし，授業時間もふやし，さらに慾を言えば，学校ごとに語学ラボラトリーなどの設備も設ける必要がある。そして，何よりも大切なことは，高等学校・大学の入学試験のやり方を，この目的に合ったように大きく改めることである。戦前式の dictation を復活する位では到底この目的を達することはできない。本当に hearing と speaking の力を試すことのできる方法を考案すべきである。かつまた，教授法にしても，アメリカ式の Oral Approach を鵜呑みにすることなく，あらゆる角度から検討して改良し，日本の風土に適したものを考案する必要がある。

以上もろもろのことは，いずれも不可能事ではないにしても，多くの年月を要することである。そして，そういう改革を必要とする世界情勢がいつまでも，少なくとも持続するのでなければ実行が困難である。また，それらの中には，難易の程度・種類の差があるし，どれをより先に実現する方が望ましいなどということもある。語学ラボラトリーを作ることなどは，資金さえあれば，そして器械の価格が安くなれば一層，楽に実現できることである。しかし先生の訓練は長い年月を要する。また，中学校の低学年で Oral Approach の実施に成功しても，高等学校・大学の入学試験の方法を改めない限り，学生たちは，例外的な場合を除いて，高学年になると元の学習の型に戻るだろう。ところが，後者を改革すれば，中学校や高等学校の教授法・学習法はそれに引きずられて変わって来るだろう。

現下の情勢下にあって，Oral Approach の普及に努力する人々のあるのは当然のことだが，それらの人々は，極めて強固な伝統に立向っているのだということを十分に自覚して，単なる権威主義に頼ることなく，真に良い方法を探求することをやめず，いかなる問題にも科学的柔軟性をもって対処しなければならぬと思う。改革というものは本当に良いものでも抵抗を受けるのが常なのだから，それ自身に欠陥があれば一層の摩擦を生ずる。良いと“信ずる”ものが一般に受入れられない時，或いは人々を心から納得させることができない時には，その原因について客観的な調査をして，適当な処置を講ずるだけの余裕を持ちたいものである。

（東京大学教授・ELEC 理事）

〔注〕は p. 21



訓練のある英語教育

中島　文雄

日本では外国語を学ぶことを「語学」とよんでいる。語学というと何か学問のようにきこえるが，もちろん「語学」は「言語学」のことではない。しかしそれにしても日本における外国語の学習は，語学と言いたくなるような学問的扱いをうけている。学校で英語の時間といえば，英語のテクストを前において，日本語で文法論をやったり，日本訳をこしらえあげる作業が主になっている。これは英語の時間も，数学や物理の時間と同じように，学問をする時間であり，国語の時間と同じように解釈をする時間だと思うからであろう。もちろん，英語の構造に関する文法的知識も必要であり，読解力の養成も大切であろう。しかし英語の時間は何よりも，英語の訓練をする時間なのであって，生徒の耳や口を英語に慣れさせるようにしなければならない。

近ごろは oral approach ということが唱えられて，中学の英語教育には多少改善のあとが見られるようである。しかしまだこれは一般的な風汐ではないし，またすでに機械的な pattern practice に対する批判も出はじめている。わけわからず英語をおうむのように繰返しても無益だというのである。たしかにそういう心配はあるが，意味のわかっている英語を繰返し練習することは，無益どころか大いに奨励さるべきことである。それが外国語学習の本道であると思う。

普通は印刷された英語を目で追って，その意味が日本語の形でわかれば，それで英語の学習が終ったという。しかしこれでは英語を本当に学んだことにはならない。英語を学んだといえるためには，ある程度英語を produce できるようでなければならず，これには訓練が必要である。そういう訓練のない英語教育は，体育の授業に解剖学や生理学ばかり教えて，体操の実技を仕込まないのと同じである。日本の英語教育にはそういうところがある。目と頭だけの英語では，本当の読書力も養えないのではなかろうか。

英語の時間に英語の練習をするといっても，一学級の生徒が多く，一週の時間数が少い現状では，多くを期待できないことは言うまでもないが，練習の時間を多くするために，訳をつけることをやめたらどうであろうか。訳をはじめから与えておく。教科書の巻末に訳がつけてあってもよいと思う。そうすれば意味のわかっている英語を練習することになる。今の授業では判じ物を解くように英語を解きほぐしていって最後に訳をつける。訳をつけたところで終りになるが，本当はここから授業がはじまるべきである。もちろん英語構造の文法的説明は必要であろうが，それは最少限にしておいて，テクストを暗誦するとか，中の慣用句的なものを取出して，これを応用した表現を作ってみるとかいった練習をする。とにかく口に出して英語を発音し，これを記憶するという努力をする。実技に重点をおくのである。

こういう主張をすると，それでは英語を通して生徒の教養を高めることは，期待できないと反論されるであろう。たしかに英語の練習という観点からは，高度の内容をもった教材は不適当で，どうしても平易な英語のものを選ぶことになる。私はそれでよいと思う。平易な英語が身につけば，学校の英語教育は成功したのであって，いくら高級な教材を使っても不消化では何にもならない。日本の英語教育はあまりに消化不良ではなかったか。英語を通しての教養といっても，現代は明治時代のように，外国語の書物によらなければならないということはない。それよりも現在では大学生といえども，明治時代の大学生のようなエリートではないから，外国語の読書力は貧弱である。英語の教養的価値は，むしろ英語を身につける訓練そのもののなかに見出さるべきであろう。

（東京大学教授・ELEC 理事）

英語教育の効率を高める

粕谷　よし

英語教育への関心が近頃一般に深まって来たが，これはあながちオリンピックの故だけとは考えられない。諸方面で外国との交渉が頻繁になるにつれ，いざという時に従来の英語教育が大して役に立たないことがわかって来たのが，その要因の一つであろう。

では，どうしたら英語教育の効率を一層高めることが出来るか。ここに日頃思うことを少しばかり述べさせて頂く。

この頃の流行を追うて，ただ英語を喋べれるというだけでは仕様がない。心にあるものを正確に伝え，内容のあるやり取りが出来なくては語学力が強いとはいえない。英語を聞き，話す能力の養成は確かに肝要で，従来の訳解一辺倒或は文法過重視のやり方を是正する為には，これをいくら主張しても過ぎることはない。特に入門期において，工夫を充分にこらしたオーラル・アプローチの価値が考えられる。そしてこれも，なるべく早い時期に始めたい，即ち小学の頃から音の流れに親しませ，自然に英語の調子に馴ませたいものである。

中学や高校では，先ずオーラル面を強調し，漸次読み書きの訓練に向って進み，もって英語学習の四技能を円満に訓練して欲しい。大学への入試に災されて，中学時代から新しい方法でよく教え込んで来ても，高校後期においてせっかくの努力も水泡に帰するといって嘆いておる教師があるようだが，そういう人達はなお更堅い信念をもって真に役立つ語学教育を続けてほしいと思う。幸い入試問題も最近ある程度改善されて来たようだが，大学側は一層努力して，四技能にわたるテストや，英語の背景となる文化の理解を含む問題を作成し，それも一人や二人の教授に任せておかず，委員の総力をもって練り上げることが望ましい。大学入試が高校へのよい指導となれば，高校卒業までに基礎的な訓練が徹底的になされ，大学前期の授業も今よりらくになり，本質的な英語教育が出来るのではあるまいか。因みに欲をいえば，高校の頃から大学を通して自由作文を充分に課して，和文英訳的でなく，英語でじかに物を考え，自然な英語で書くことが出来るように，また，ちぐはぐでなく，全体に整った文章を作る習慣をつけるようにしたいと思う。

以上あれこれ並べたてたが，終りにもう一言。最近いろいろな teaching aids や language laboratory など新しい施設設備に留意するようになったのは喜ばしいことである。しかし杞憂がないでもない。うっかりすると，それらに頼り過ぎて，教師がその全力を出さずに終ることがありはしないか。補助的なものを効果的に駆使するには，教師にとって一層の勉強と工夫が必要となる。このことを等閑視して aids に依存し過ぎると，その方に気を取られて肝心のところに熱が入らず，人としての教師の影が薄れてしまう。意気というか情熱というか，教師のうちに潜む何か貴い力が生徒の心に泌み込んでいく，そういう生きた連がりが英語教育の場でますます密になることを切望する。

（津田塾大学名誉教授・ELEC 理事）

日本人の英語

鹿住菊太郎

日本人の外来語好きは，今に始まったことでなく，かなりの昔から知識階級の間でもてはやされ，それが次第に一般大衆の間に滲透し，今ではわれわれの日常語になっているものが相当にある。英語からはいってきてわれわれの身近な衣食住の生活にとけこんでしまったものでも，シャツ，ネクタイ，スーツ，ミルク，サラダ，テレビ，ヒーター等

等数限りない。しかもマスコミの発達とともにこれらはふえる一方である。問題は，一般大衆にかなりの影響力をもつジャーナリズムのこうした英語の取扱い方と大衆の受け取り方にある。

最近の各種製品の宣伝文句にはかなり英語が用いられている。一般消費者に斬新な広告効果を与えるために英語をある程度使うことには異論を唱えるものではないが，極端な使い方は一考を要すると思う。たとえば一寸新聞紙面を見渡すだけで,「これがニットのホームウエアです。ご主人のホリデイウエアにどうぞ」とか「一貫したシステム思想を誇る製品シリーズはいま強力なサービス態勢をバックに躍進している」といった広告文面に出くわす。製品の販売対象客が皆英語を知っているとは限らない。英語を知らない者にとっては何を広告しているか，逆立ちしても金輪際理解できないであろう。

ある日，デパートのレジャー用品売場で買物をした。女店員が「これはレジャーに最適です」というので,「レジャーって最近皆が言っているけど，どういうこと？」と尋ねた。そくざに女店員は「海や山に行くことですよ」と，こんな新語を知らないかというような顔付で，回答したのに驚いた。デパートの女店員ならすくなくとも中学校で英語の基礎は習った筈である。もし「レジャー」という単語を忘れていたら辞書を引いて「暇」という正確な意味を確めてほしいものである。

「早慶戦はそのシーズン弱いと言われているチームが勝つというジンクスがある」といった新聞記事やラジオ放送を見聞された方も多いと思う。このジンクスという単語の意味が「縁起のわるい人（物）」だということを知って使っているのか疑問である。このような良い加減な使い方は感心しないし，中途半端な知識による使い方は何かと弊害を伴うことが多いので，気を付けて欲しいものである。

民放のアナウンサーのCM放送にも誠に耳を疑いたくなるような発音が再三聞かれるのは遺憾である。テレビ番組に「スター千一夜」という主として芸能人と対談する番組がある。ある夜の番組は米国のスターとの対談であった。もちろん聞き手は司会者業として名を売っている日本人である。「オオ，イエス，フフン……レアリー？……マイ・ガーリー」といった調子の英語を使っていた。途中で「Where *did* you born？」とも言った。いづれにしても，こんな英語しか話せない司会者を使うスポンサーもスポンサーだと思った。「Where did you born？」でも相手には通じたが，決してほめた話ではない。

よく専門分野における討論とか論文になると英語は分るが，日常会話になると全くお手あげといった中年紳士の話を聞く。もちろん，昔の英語教授法にも問題はあった。当時はオーラル・アプローチといった教授法も，ラングエージ・ラボラトリーといった科学的教室もなかった。確かに外国語は繰返し反復し練習しなければ上達しないが，昔は会話の練習などというものはなかった。

学校教育の目的が，米国のように人間形成を主眼とし，学生もその心積で勉強すれば，あらゆる面で実力もつくが，日本の場合は，総じて，社会に出る為の手段として，学校側も学生側も考えているようである。試験の成績だけが物を言う—これでは受験の為に勉強し，試験が終れば忘れてしまって，仲々実力は養われない。イージィ・ゴーイングでは英語は上達しない。根気と辛抱がかんじんである。しかも基本は確実に覚えることである。

われわれの言葉の中に，英語を多く使いたがるのは日本人の見栄からであろうか？　使って悪いというのではないが，使うのなら相手を考えて，徹底して正確な格調の高い英語を使うよう心掛けたいものである。

（千代田工業株式会社常務取締役・ELEC 監事）

誠心誠意

福原麟太郎

私はどうやら，流行の英語教育の思想や方法に，いつも反対の意見を抱いているように思われて居り，私自身もか

えりみて何だか新英語教育について異端の考を持っているかのような印象があるので，ひとから英語教育の敵と見なされても仕方があるまいと観念したりする。

ところが実際は，敵でも何でもないので，英語教育の意義や目的に於て，大して違ったことを考えているのではないのである。だから敵役にまわされるのは別の理由によるのであろうと思う。おそらく私のあまのじゃくの感情の結果であろう。英語教育についての私の思想は岡倉由三郎流で，世間で何か新しいことを主張宣伝されても，そんなことは先生がもう三十年も前から言っていたことだ，弁慶いまさら驚くべからず，などと思うことが最近半世紀の間に何度もあった。そういう折に，新説に飛びついて賛成する気にはならなかった。その上，自分が信念をもって立っている場所を転々とは明け渡さないという気があるから，まるで先物買いみたいに，新らしいといわれるものに馳け寄ってゆく群衆を見ると，どこやら浅ましいような感じがした。保守反動結構，自分が納得するまでは自分の座を動かないと心に決めていた。

しかしそのうちに新らしい学問研究がどんどん現われて来，それが英語教育の方法技術の上に影響しはじめると，私はそういうことを特に勉強しているのでないから，日々改まる新断面がだんだん解らなくなる。今ではもう技術的な新英語教育法はお隣のお家の話ですらなくなり，声も聞えず，珍らしいもののお裾分けを頂くことすらなくなった。こうなればもう敵も味方もないと自分では思っているのだが，何だか妙なわだかまりがまだ残っている。

それは私がひとさまより以上に英語教育における精神主義のようなことが好きで，教養とか文化とかいう目的を重視し，どこか技術を軽んずるというところがあるからであろうと思う。おそらく，彼は「役に立つ英語」を卑しめるだろうと思われているということもあろう。私は役に立たない英語を決して尊ばないが，あまりに際物的な用途に英語を売り込むのは，おのれを卑しくすることだと考える。そういう私の考え方が私を流行の世間から孤独にさせているようである。

私は英語教育というものはわが国民の精神的発達に必要なもので，遠い将来の幸福を培うものだから，どうか宏大な理想をもって行なわれたいと願っている。先づ第一に誠心誠意これに従う。私は技術や理論の末葉に走って軽業師のように見事な教師よりも，下手ながら一所懸命になり，この道が好きだからこそ心をこめて，つまづきつまづき教えている教師に拍手をおくる。英語教育に望むことという題をいただいて，私の考えうることはこういう身の上話である。　　**（東京教育大学名誉教授・ELEC 理事）**

辛抱づよく

上代　たの

英語教育協議会が日本の英語教育の根本的な改善を目指し，段階を追って基本的な計画をたて，その実現に必要な活動をはじめてから８年あまりの時がたちました。その間に実際に運ばれた各種の事業は，ようやくその根が深くひろくそして強くはりひろがって来ました。

この機にあたり，あらためて「日本の英語教育に望むことは何か」と考えてみると，まだまだ大きな，仕事が前途に浮びあがってくるのです。しかし，もっとも肝心で手近かなことを一つだけとりあげてみますと，わたくしは，やはり，きわめて平凡なことながら，わが国の中学，高校，大学と，その発達の段階にわたる英語教育の一貫性を，もっともっと徹底させなければならないと考えるのです。足ぶみをさせたり，横道にそれさせたりしないで，その学力を，

だんだんと広げ，深め，高めてゆくことだと思います。断層と分離という致命的な欠陥から，英語教育を救い出さなければなりません。いわゆる聞くこと，話すこと，読むこと，書くこと，という4つの面の調和ある訓練をとおして，けっきょく心の窓を世界に向って開き，外国文化の正しい学び方を身につけ，全世界連帯の意識を強め，人類生活の向上のために積極的に貢献できるような人間を形成することにあります。

英語教育をとおして開かねばならない心の窓は，思いきって大きな窓，見はらしのよくきく窓で，政治，経済，文化など，人類社会の向上に必要な，あらゆる活動が活潑に行なわれる機縁になりうるものにしたいと思います。

もっと身近に，そして具体的にいえばまず，日本の青年たちが，将来，学問，思想文化等あらゆる世界的な交流や，協力をする場合，自分の信ずることを何の気おくれや，不安を持たずに，国際語としてその英語を自由に駆使できるよう助成することです。何としても辛抱づよく仕事を進めることが第一です。

（日本女子大学長・ELEC 理事）

役に立つ英語・正しい英語

竹内　俊一

今私は学校で英語を教わっていたり，特に英語の学習にはげんでいる者を，身近に持っていない。だから，今の日本の英語教育が，例えば私が，若しくは私の子供が，英語を勉強していた頃のそれに比べて，何れ程進んでいるのか，その実情を知らない。

けれども，学校を出て会社へ入って来る若い連中の英語の力，ことにその会話の力が満足するに足るもの，どころか，甚だお粗末なものであるという事だけは，私自身の所見としてハッキリ言える。だからそれから察して，日本の英語教育，少くとも中学校や高等学校の，（大学の普通の，という事は英語を専攻しない学部で何の位英語を教えているのか知らないが，若し教えているとして，その）英語教育が，私が教わった頃—と言うと，もう四，五十年も前の事になるのだが，その頃—のそれに比べて，あまり大した進歩をしていないのではないかと私には思えてならない。

そこで，（本当の事を知らないで居て，注文を付けるのは乱暴であるとのそしりを免れぬかと思うが，それをも敢てして）私の希望したい事は，先づ第一に，「役に立つ英語」を，役に立つように教えて頂き度いという事であり，第二には，之も同じ事になるとも言えようが，「正しい英文」（話し言葉も同じだ）を教えて頂き度いという事である。

第一の「役に立つ英語」を，役に立つように教えると言うのは，申す迄もなく，話して英米人に分って貰えるような英語を話す，と同時に英米人の言う事が分るような力を付け，英米人に見せて，意味の通じるような英文を書く力を付けてやって頂く事である。もう四十年も前の事になるが，私がロンドンに居た頃，ある高等学校の，有名な英語の先生が来られて，地下鉄に乗ろうと思って，切符売場に行って，行く先（それはBank という駅であったが）を言われるのだが，何うしても通じない，それで「馬鹿だな！バンクだよ，バンク。バンクが分らないのか！　バンク，バンク」と怒って言い続けて居られるうちに，ついに力が入って Bank の発音が出たらしく，先方も，之で安心したというような顔をして切符を出して呉れた。然し先生の方では，イギリス人の英語の学力の不足がお気に召さなかったらしく，「イギリス人というのは，英語の分らない国民だ」という名言を残して，間も無くロンドンを去られた，という話を聞いた事がある。何も英語に限った事ではない。日本語でも何語でも，言葉というものは，意志，感情，そして思想，を伝達する道具である。それが一々怒鳴らないと，駅の名前一つ先方に通じないようでは，切れない刃物，線の切れた電話機と同じ事で，持っていても用を為さず，徒らに感情を高ぶらせるだけのものである。教えるからには，役に立つ英語を，役に立つように教えて頂き度い。

次には「正しい英語」であるが，実は私は，五年や十年，それも一週に二時間や三時間，学校で英語を教わっただけで，正しい英語が話せたり，書けたりするとは思っていな

い。毎日少くとも二，三時間英語を聞くか英文を読むかする。そうした努力を三年，五年重ねて，はじめて，英文の構成が頭に入る，英文が身に着く。その点，全く異った構成の言葉を喋舌り，文章を読んで育って来た日本人が，英語をモノにするという事は生やさしい事ではない。本当にモノにするためには，単に文章の構成ばかりでなしに，その裏付けになっている，英米人の日常生活，風俗，習慣，歴史，伝説，思想，そこから来る発想法の相違まで知らなくては，本当の意味での「正しい英語」は分らないし，ましてや話せない，書けない。だから，そこまで学校で教え込むということは到底望めない事だと思うが，せめてその手掛り位のものは学校で教えて置いて頂き度いと思う。そして英語を通じ，英文を通じて英米人を知り，英米の文化を知る事の楽しみに，若い者の眼を開いて置いてやって頂く事が出来たら，英語教育の効果も大であると言ってよかろうと思う。

（三菱石油株式会社取締役会長・ELEC 理事長）

国際的関心の養成

市河　三喜

"ELEC BULLETIN" の読者は日本の英語教育が如何にあるべきかは十分承知して居り，またそれを実行して居られるので，その上に更に何かを望むことは隴を得て蜀を望むようなものであるが，しかし上記の問題で何かを書かなければならないとすれば，私としては勢い古い話を持出すようなことにならざるを得ない。

御承知のようにわれわれの尊敬する新渡戸稲造博士は「何の目的で英語を学ぶか」と問われて「太平洋の橋となるのだ」と答えたといわれ，神田乃武先生は日米間の "living bond of friendship" となることを目的とされた。われわれ後輩は多かれ少かれこれら先輩の心を心として，その歩んだ道を進むように努めなければならない。

世界は益々狭くなり国際関係は愈々緊密を加えつつある。そして意志伝達の道具は英語以外にはないと言っても過言ではない。国際関係にこれほど大きな役目を持つ英語を学生に教えるという大任務に従事していることを心に持ち，その教授法，その道具の使い方を研究すればよい。そしてその道具をよく磨いて錆びないように心掛けるべきである。

先生がそういう心掛けであれば学生の方もおのずから国際的関心を持った人に養成されるであろう。英語が国際補助語であるということにも誰も異存はない。ヨーロッパでも英語はフランス語にかわって第二外国語となりつつある。英語を第二外国語として話す人の数を見積もることは非常にむずかしいけれども，Marckwardt の *American English* によれば，ある権威筋は五千万といい，他の人々は一億二千五百万という。事実はどうであろうとも人数が増加しつつあることだけは疑うことが出来ない。また世界の五分の二の放送局は英語で放送し，世界の郵便物の四分の三は英語で書かれると概算されている。Pidgin English のような変態英語も英語と言えば，人口の増加に比例して，英語を話す人口の数はやがて数億に達するであろうことは疑いをいれない。

外国へ出かけることが国内を旅行するよりも楽になった今日，遅かれ早かれ誰しも外遊の機会はあるであろう。英語教育に当る諸君もこの事を考慮して国際的関心を養成することに努めていただきたい。

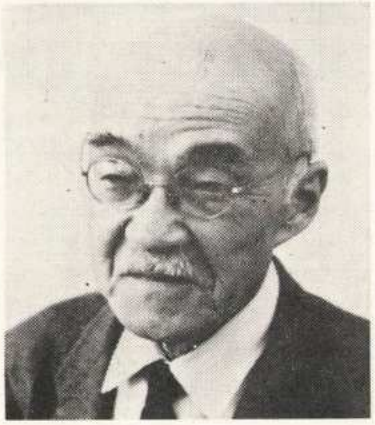
（東京大学名誉教授・ELEC 理事）

英語のリヅムと英米の文化

斎藤　勇

日本における英語教育は，戦前に比べると非常に進歩した。外人との交渉や接触が頻繁になったので，日常生活の不便をなくすため，会話につかう英語が大切だと思われる

ことは，あたりまえである。ELEC はその点にも最初から注意して来た。そして日本の初等英語教育に ELEC が大きな貢献をしたこと，改めて吹聴するまでもない。初等英語教育の方面については，門外漢である私などは，注文がましいことを言う必要はない。ただ，何か言えと求められると，二つの点が念頭に浮かんで来る。第一が intonation につき，第二は culture について。



Shakespeare 喜劇の題 As You Like It は，たいていのばあい，like に stress を置いて読むだろう。しかし You に重きを置いて読むこともできる。そういうつむじ曲りの読み方をすれば，Bernard Shaw のように，シェイクスピアという男は彼の一座の窮乏を救うために「わたしが好きな作ではなく，皆様がお好きになる芝居です」と言わんばかりの題をつけたのだという意味になる。

また I'll go to Kyoto tomorrow. という簡単なセンテンスでも，I, go, Kyoto, tomorrow のどれにストレスを置くかによって，彼ではなく私が……行かないのではなく行くのだ，……奈良ではなく京都に……，あさってではなくあす……というふうな意味が含まれることになる。

だから，単に単語のストレスだけではなく，文としての重要な部分に力を入れて読むことを生徒に注意することが大切である。このような prose rhythm に馴れるならば，詩のリヅムの美わしさを鑑賞することもよくできるだろう。英詩は一定のリヅムをもっている文章であるから，intonation の練習にもよい教材である。そして初歩の人にも読みやすい，しかし児童向きのものではなく，おとなにも考えさせるような詩を読ませることが望ましい。

ちなみに，日本語はストレスに重きを置かず，リヅムの法則もきびしくないので，七-五とか，五-七とか，シラブルの一定数を和歌や俳句などの条件としているので，我々は英語を読む時に，英語のリヅムに無頓着過ぎるくせがある。散文のリヅムに注意するようになるなら，これからは英詩の表現形式の微妙な点をもっとよく会得することになるだろう。

第二，英語の教師も culture を身につけておかなければ，英語をしゃべる機械になってしまうかも知れない。ここに culture というのは専門の知識よりもむしろ一般教養のことである。英語は英米国民の思想を背景とする言葉なのであるから，英米人の自叙伝である英米文学に親しんでいなければ，英語を十分に理解することはできないだろう。そして英米文学に親しんでおれば，適切であるだけでなく，暗示に富む表現をもおぼえることになる。

また適切な表現とは，ただ文法にまちがいがないというだけではなく，常識を逸していないものである。たとえば，Is this my nose? と言えば，それは文法に反することはないが，しかしこの一文は，鼻の感覚を失った人でも口にすることではない。異常心理か精神病にかかっている人しか言わないことであろう。たとい教授上の都合で，このような表現が必要であるばあいがあるとしても，かような愚問を教材にするならば，その教師の思考力があやしまれることになるだろう。そして生徒は間接的には英語そのものをも軽蔑することになるかも知れない。初等英語の放送にこのような英語が出て来るのを聞いたので，念のため一言しておく。

（国際基督教大学教授・ELEC 理事）

中等英語教員諸君の奮起を望む

松本　重治

日本の英語教育が効果的に行われて，多くの日本人，とくに多くの青年が英語を話したり書いたりすることができるということほど，日本の将来のために重要なことはない。たんなる社交的の英会話のことをいっているのではありません。ほんとうに身につけた活きた英語力をいっているのです。

日本の人口増加率は近年比較的低率を続けてはいますが，この狭い島国が，将来の日本人口を支え得るものとは決して考えられません。ことに若い年代の人々のエネルギ

ーのはけぐちは，どうしても海外の天地に求めなければならないでしょう。して見れば，日本語だけでは，海外での仕事や海外との関係の仕事のためには，甚しく不充分であり，国際語である英語の力が，先決条件となります。日本百年の大計の一つは，従って，活きた英語力を青年に与えることにあります。

いままでの日本の英語教育は，海外の文化・技術を吸収することに眼目があり，大学や高校の入試も解読に重点があり，その結果，話せる英語力や書く英語力は，現在，日本人一般にとって，あまりにも貧弱なものです。これからの日本は，海外に働く人々，海外と交渉する人々が絶対に必要となりつつあり，従って，日本の英語教育に一大革命が要請されます。現在，多くの国際会議が開かれており，その度数の激増も，いよいよ必要と見なければなりません。

英語教育を新しい日本の要求に応ずるように改革するには，少なからざる障害があることは周知のことではありますが，中等英語教育にたずさわれている多くの方々が，奮起していただければ，越え得ない障害は一つもありません。英語は難かしいとか，不必要だとか，の誤った考え方を，このさい，やめていただきたい。新しい教え方習い方を実行すれば，英語は決して難しいものではありません。不必要だという考え方などは，青年の前途を暗くし，日本の将来を拓く可能性を否定するものとしか考えられません。

日本人は，なによりも日本人たる教養を身につける必要はあります。しかし日進月歩の世界の学問や文化や技術に背を向けては，新しい日本人たるの教養は，不充分となりましょう。そのうえ，日本人のいちばんの欠点は島国根性であり，この島国根性から脱却するには，活きた英語力を備えることが最良の方法ではありますまいか。島国根性から脱却して，国際性を身につけた日本人は，平和のうちに，世界に雄飛する国民となることは，われわれのみならず外国の人々が予見しているところです。

アジア諸国の近代化に協力し，人類の福祉と世界の平和に貢献し得るものは，新しい型の日本人ではあるまいか。活きた英語力を身につけた日本人であれば，必要な英語を習得することも，容易なことです。外国語を習うこつも，おのずから，つかめることでしょう。日本青年が活きた英語力を身につければ，日本の将来は洋々たるものであることを信じてうたがいません。このことだけは，中等教員諸君にわかっていただきたいものです。

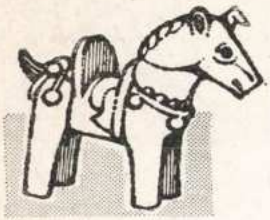
（国際文化会館専務理事・ELEC 理事）

英語教育を効果的にするヒント

岩崎　民平

かつては大学や専門学校では語学は参考書が読めればよいという単純な考であったが，世界が小さくなった今日では，わが国の科学界も海外との交流がしきりで，学者は毎年のように外国に出かけて研究に協力し，書物になっていることはもはや古典的なことと考えられているようである。既に私の身近に知っているところでも，アメリカの若い物理学者が東大の物理学教室で研究をやっている。研究交流は一方的でなくなっているらしい。

これに比べると，日本の大学で英語を教えている先生は，一度海外留学（長くて一年）に出るくらいのところで，その機会も早くは来ないという心細い現状である。そうしたいくつかの大学が日本の英語教師の供給源だということを考え合せると，これでよいかという気持も起こってくる。しかし，もちろん，留学が唯一の語学研究の道ではない。留学しなくても語学の習得は可能であり，留学はその国語



の文化的背景を見てくるのが主であろうと私は考える。

ことばの本質というものが，口から出す音であり，それを記録する文字は第二次的のものであることが確認された今日，英語の学習法の正しい方向もおのずから定まるわけで，今それをここで述べるひまはないが，日本の英語教育を効果的にするヒントの二，三を箇条書きにしてみよう。

(1) 英語学習の初めから有能な教師を配すること。(教授の効率を高めるには，一クラスの学習者の数の制限，また一週の時間数も問題になる。) こうして初めから学習者に unlearn しないでいい良い癖をつけさせる。

(2) 教師を養成する大学では，単に必要単位を学生に揃えさせるだけでなく，実際に学習者に訓練が与えられる実力を備えさせた学生にだけ免許状を与える制度にする。

(3) 試験 (ことに上級進学試験) は筆記試験だけではなく，英語の全能力をみることのできるようなものにする。

(4) このようにして，中学からむだなく英語学習を進め，高校を終るまでに基礎をつくりあげ，大学では専らその活用を計らせることにする。

(5) Language laboratory も教授の有力な補助設備であろうが，これは設備のあるところで共同研究をやって最も効果的なプログラムをつくるようにするのが望ましい。

(東京外国語大学名誉教授・ELEC 理事)

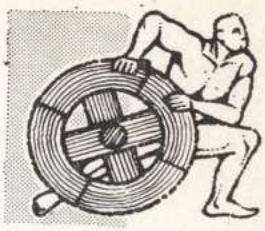
随　　想

太田　朗

「仏は法を売り，祖師は仏を売り，末世の僧は祖師を売る」というのは，落語の「一目上り」の中の文句だが，自身で直接に法に到り得ないものは，どうしても仏や祖師を仲介として法を窺い知るより仕方がない。この場合大切なのは，目的はあくまで法であって仏や祖師ではないということ，そして仏や祖師のいったことは，末世の僧によって針小棒大に伝えられる傾向があるから用心しないといけないということである。仏はきわめて融通自在な考え方であるのに，末世の僧ではそれが金科玉条，身動きのならないもののように考えられることも間々ある。

Anthony 教授は，approach, method, techniqueを区別して，approach とは方法論の根底にある一連の仮定（たとえば言語は話しことばを主体とするとか，言語習得は習慣の形成であるとかいったような）をいい，method はその approach の上に立った相当長期にわたるプログラムであり，technique は毎回個々の問題を教えるのに使われる技術（たとえば [l] と [r] を教えるのに，口型図を見せるか，日本語で発音の仕方を説明するか，鉛筆を口にさしはさんで舌の接触工合を示すかといったような）であるというが，大体仏や祖師の説く所は，approach や method であって，technique の問題にまでは立ち入らない。そして同じ approach の中でいくつかの method が可能であり，同じ method によるにしてもいくつもの technique が可能であると Anthony 氏はいう。仏や祖師は大体 approach や method を説くのだから，融通がきき，弾力性があるのは当然で，それを technique の問題と思いあやまると，身動きがならなくなる。Technique というのは，個々の先生が，生徒の能力，環境，興味，自身の能力，準備など個々のケースに応じて，自分で考え出すより仕方のないものが多い。また一定の型の technique を習ってもそれをその場その場で効果のあるようにするには，先生の工夫と経験が必要である。現実は型通りには行かない。

更にまた，仏でも祖師でも一定の所に止まってはいない。10年前と全然同じことをいっている仏というのは余りない。大筋は余り変らないかも知れないが，細かい点は絶えず変化する。そして10年たてばこれは相当なものになる。General semantics では，だから，「M氏いわく」ではいけない，「何年何月のM氏いわく」のようにしなければいけないという。また二人の仏や祖師が徹頭徹尾同じことをいっていることも余りない。時間が経てば意見が変り，人によって意見が違う点があるというのは，その学問が成長し



ている証拠であって，万人が認める不変の真理などというのが与えられるのを待つのは，百年河清を待つに等しい。これが永遠不変の真理であるなどというのは，それによって科学的探求の道をとざすことになるからよろしくない，真理は vulnerable なものだというのは，プラグマティズムの元祖の Peirce の考えである。われわれは労せずして出来合いの永遠の真理などというものを仏や祖師から与えてもらえると期待してはいけない。むしろ仏や祖師とともに絶えず勉強して行くことが必要である。

（東京教育大学教授・ELEC 理事）

学習の基本的心構え

岩佐　凱実

日本人は他民族に比べて，語学力が劣るとよく言われる。例えば英語について言うと，その理由として，抑々日本語自体の構成と英語のそれとが根本的に異なっていること，風俗習慣，物の考え方などから来る表現方法，発音方法等の相違，抑揚・アクセントの強弱などがあげられよう。

中国語は，漢字という日本語と共通のものを持ってはいるが，その構成は主語・動詞・目的語の順序で英語に類似し，発音自体も抑揚・アクセントに富んでいる等の関係から，中国人が我々よりも英語習得上容易なことは事実で，環境への順応の速さも旺盛な生活力と相俟って，彼等の方が余程堪能である。

たしかに我々日本人の場合，右の理由から来るハンディキャップは大きいけれども，学習の方法をもっと工夫改善すれば，之はかなり克服出来るのではないかと思う。

さて，前書きはこの程度にしておいて，私の学生時代に受けた英語教育の経験，現在ビジネス上の必要から来る外国人との接触，英語教育のやり方の現状等より見て，我が国の英語教育の在り方，日本人の学習上の心構えについて次のことを望み度いと思う。

1.　従来の英語教育の欠陥は，文章の読解に重点を置きすぎ，人間対人間の意思流通手段たる会話を従と見做し，等閑に付した点に在ると思う。之には一理あり，実際問題として，戦前には会話能力の必要性はさほどなかったわけであるが，外国人との接触がいわば日常茶飯事となった現在では，この欠陥が痛感される次第である。勿論語学力即ち会話能力ではなく，単に実用的見地から，会話だけに重点を指向すればよいと言うのではないが，日本人の読解力は極めて優秀であり，国際間の交流が益々盛んとなった現在，外国人を理解し，国際親善を図るためには，今後この会話能力向上は絶対に必要である。

2.　外国語を学ぶに当っては，先づその国の言葉で物事を考える様に習慣づけることが大切である。表現に際し，自国語—外国語の順を追って考えるのでは間に合わない。つまり "Thinking in English" である。

次に，頭の中で考えるだけではなく，日常の自分の生活体験と結び付けて吸収しないと身に付かない。此の意味で，単に授業時間中だけの学習では不充分であり，日常生活に応用する努力を毎日続けないと永持ちしない。反覆・練習が必要と言われる所以である。

更に，言葉は，その民族の歴史・社会・風俗・習慣と共に生成流転して来たものであるから，これら人文現象をしっかり把握・理解することも語学習得上大いに役立つものである。

3.　日本の英語教育は，そして学習者も又，「文法」に拘泥しすぎる嫌いがあるのではないかと思う。文法は言葉構成上の基本的ルールであり，先づ之をマスターすることの必要性は言う迄もないが，余りかかわり過ぎると意思表示に当り，頭が空廻りして，肝腎の言葉として出て来にくくなる。又読書の場合にも，全体の意味を感じ取るのが難しくなる。之は我々のよく経験する事実である。

4.　現在，英語教育は中学校より始まるが，出来れば，小学校の四年生頃から始めるのが望ましい。子供の時ほど，頭が柔軟で記憶力・集中力・吸収力が早く，しかも仲々忘

れない。

語学教育に際し，我々は従来兎角，視覚を中心とし，聴覚による訓練を怠ったのは事実である。

幸い，最近では，レコード・リンガフォーンなどによる耳の訓練が重視される様になって来ているのは結構であるが，私は只それだけでは充分でなく，2. に述べた外国語学習の基本的心構えを忘れない様にすることが先づ肝要と思う。以上の方法で英語教育に当れば，効果は従来よりもずっと挙がると思う次第である。

（富士銀行副頭取・ELEC 評議員）

自然，実用，窮学

酒井杏之助

英語教育に対する希望は結局外国語の教育は如何なる方法によるのが一番効果があり入るに容易で又深く窮めることが出来るかという問題を解決してからとりかからなければならない。言語は実用が目的だからがむしゃらに実際にぶつかって行けばよいという考え方がある。泳ぎは水にたたき込んでしまえば苦しまぎれに必ず泳げるようになる。それもほんとうである。外国語を全く知らない人でも外国人しか居ない処へ飛び込んでほんとうに困れば半年もたてばどんな人でも日常の言語には困らなくなる。然し基礎をしっかりして置かないと或る処まで行くと進歩は止ってしまう。泳ぎも基礎の練習を積んでいないと自己流の泳ぎになって固まってしまい先先延びない。日本の従来の外国語教育は専ら文法から入って外国語を読むこと外国語で書くことから手を付けて来た。漢文に返り点を付けて読んだのと似た筆法である。外国語に返り点を付けて読みはしなかったが外国の文章なり会話を頭から丸呑みにして理解しようとはせず it それは dog 犬であるというように心の中で返って理解して教えた。幼児が母語を憶えるのはそんな廻りくどいことはしない。文字を知らない中に耳から言語として入って来る。自分が発表する場合でも考えた通りを片言でも平気でしゃべる。少し大きくなってから文字を覚えて言語の基礎の上に読み書きの練習を積み重ねて行く。外国語習得の場合にも此の順序で行くのが自然である。今日の外国語教育は何れの国でも此の方法によって効果をあげている。これは日常に実用に便利だからというだけではない。外国語教育は母国語教育と何等異なるべきではない。此の方法によって外国語は入るに容易になるのみならず実用に叶うのみならず立派な言語を話し文章を書き深く文学の道にも分け入ることが出来るのである。真に外国の文章を味うには正しく音を解しニューアンスを感じ取るのでなければ不可能である。ELEC の英語教育は自然，実用，窮学を目標とすべきである。これが私の英語教育に対する希望であります。

（第一銀行相談役・ELEC 理事）

語学の四つの法則

村岡　花子

私が日本の英語教育に望むことは，自分が初めて英語を教えられた十才のときから同じです。尤も，十才のときには，子どもですから英語教育に対して望むことなどはありませんでした。けれども，十二才のときに，私どもを教えて下さった教師―カナダ人―がはっきりした語学に対する見解を持っていましたので，彼女の考えかたがそのまま私のものになってしまいました。彼女―ミス・ブラックモーアは，読むこと，書くこと，話すこと，聞くこと，これは四重の語学の法則であり，これら四つを同時に，併行して進めるのが語学の勉強の目標だと言うのです。子どもながらも私はこれに共鳴しました。それ以来，今日に至るまで，

この信念は変りません。

「分るけれど，言えない。読めるけれど書けない」というのは，ミス・ブラックモーアの前では禁句でした。

戦後まもないころ，朝鮮で英語を教えているというアメリカ人が私を訪ねてきました。彼女は，自分の発明した英語教授法の規則として，読む，書く，話す，理解するの四つをいっしょに発達させることの重要性を説きました。

私は静かに彼女の言葉を聞きました，そして，静かに言いました「それは古くして新しい法則，新しくして古い法則です。私の教師は何十年か前に，少女の私にこのことを強く教えました。彼女は戦争中に故国カナダで永眠しましたが，もし彼女が生きていたら，同じことを今も言うでしょう」と。

日本の英語教育が—すくなくとも，ELEC の教育が—この方向を目指しているのは正しいことだと思います。そして，着々実績をあげていることを心から喜びます。

（評論家・ELEC 評議員）

教材，教え方，テスト

黒田　巍

日本の発展のためには，英語教育の成果をあげることが必要である。国民の誰もが，世界を舞台として活躍するための道具として，英語を身につけることができたら，日本の国力をもっと強化できるであろうと思う。

その英語教育のもっとも大切な部分は，中学校でなされているのであるが，現状は十分な成果をあげているとはいえない。義務教育の一環として，中学校で英語を教えるには，徹底した完全学習ができるように，教材を制限して，少ない教材の反覆練習をすることによって，将来に高校や大学で成長をつづけるためのよい苗の育成に十分な工夫をしたいものである。そしてそのような基礎としての英語とそれにつづく高校や大学の英語との間に溝ができないように教材の一貫性をはからねばならない。

次に大切なのは教え方である。根本的には Oral Approach の普及と徹底をはかることが必要である。役にたつ語学は音声面の学習を基盤としなければならない。日本の英語教育は伝統的に解説を主とした学習に傾いていて，これを耳と口で直接に実践学習する方法にきりかえるには，かなりの努力が必要である。学生より教師の側に一層の抵抗がある。その困難を除去するために，ラジオ・テレビ・テープレコーダーなどの利用が考えられねばならない。

Oral Approach を入門の当初から用いることは，その後の学習の基礎を作るのに役立つ。しかしその具体的な方法について，更に実験や研究をつづけるべきである。特に読み方や書き方との関係や，意味を理解させる方法や母国語との関連づけなどの面で，実験にもとづくはっきりした結論がほしい。従来むげに有実と断定している方法も利用のしかたによっては学習を助けることにならぬとも限らない。

もう一つ改善したいことは test の問題の出し方である。現在は一般に test のために学習がゆがめられていることが多いようである。例えば大学受験に一万語を知っていなければならないというような説がまじめに信じられていることが，高校の教育をひどく過重にしている。中学から大学までの全体を通して無理のない語学教育を実現したい。

（東京教育大学教授・ELEC 理事）

英語教育の躍進

高橋　源次

英語教育の前進のために三つのことを考えてみたい。三つとも新しいことではない。考えられてきたことであり，今後も英語教育に結びついた基本的問題として重視せねばならぬものである。

第一の問題は入試方法の改善，第二は音声教育の優先，第三は現職教育である。

入試方法は近年とみに改善されてきている。物理的条件がともなわねばならぬことはもちろんである。金も要るし，時もかけねばならない。というのは試験場の整備，試験期間の延長，それに付随する諸多の問題などの条件がそろわねばならない。しかし，最善の条件がそろわねば次善から漸進していかねばならない。そしてその根本理念は，入試は評価が優先すべきであるということである。というのは，選考の方に傾きやすい出題方針を，受験者の能力を evaluate する方向に向けねばならないということである。受験資格になっている既修学力を評価することが重要である。選考しやすいことは考えねばならぬことではあるが，受験者本位が優先すべきで，selection に集中するようなことのないようにせねばならない。

第二は英語は音声が基礎ということに立脚して，その教育には音声を大事にしたいことである。訳も作文も話し言葉が基である。Oral Approach を強調するのは何も会話に上達することだけをねらっているのではない。英語教育のねらいは英語技能の全面に上達することにある。その点で，実用とか教養とかいうが，実用に役に立たない教養でもいけないし，教養をつけ高めることに無関係な実用なんてものはない。個人の教養は国家でいえば国家の文化である。英語教育はわが国の技術，産業，文化の一切を含めた国力につながっているものである。英語をその基本線から考えていかねばならぬ。口先きだけうまい人間をつくるのでは教育という名に当らない。英語教育は英語力の全域にわたっての育成であって，その基本は音声としての英語の認識が第一である。

第三は現職教育である。先生は折に教壇を降りることがいい。教えることは学ぶことといわれるが，教師は生涯生徒の魂を捨ててはならない。会社など実際界にはいった人も同じことである。新兵の心をはなすなという諺があるが，どの職場の人も同じだとおもう。生涯勉強である。英語力の保持，増進には，現職教育の機関を大いに利用することである。研いでいないと，鋭利な刃物も錆びつく。

理解と表現の二面をもつ英語はもろ刃のつるぎと言ってよい。これはいつも研ぎ磨いていねばならない。英語は伝家の宝刀のように思う人もあろう。切れ味を発揮することがめったにない人もあろう。それにしても，いつでも役に立つようにしておかねばならないであろう。集中的，常設的機関による現職教育の重要性を見のがしてはならない。新知識の研修補充をもねらいにしている研修機関の利用はいくら強調してもしすぎない。

以上三点にふれてみた。何れも，わが国の世界的役割の達成にはなくてならぬ英語教育の躍進というねらいの上に立っていることを再確認して，わが国英語教育の発展を期図するものである。

（明治学院大学名誉教授・ELEC 英語研修所長）

「わが国における英語教育の改革」 注：母国語の場合には，音声言語を大体習得した後に（即ち基礎的なことは楽にしゃべるようになってから），小学校へはいる前後から文字言語を習うのだけれども，外国語の学習の場合には，「かなり流暢に話せるようになるまでは絶対に文字を教えてはいけない」というようなことはないと思う。或場合には，文字が発音の習得や記憶を一層楽にすることもある。「音声言語の基礎の上に」というのは，短い発話の，native speaker の発音（或いはそれに近いもの）を十分に聞いて，それが楽に真似できるようになった時（或いはそれ以後）に正書法を習う，という意味である。こういうやり方で，発話と正書法とを相前後してほぼ並行的に教えるようにすれば，わが国の中学校などの英語教育法にも或程度譲歩したものともなるが，それだけに却って効果的かも知れない。

特集 II

座談会

左から寺師明治、川道治雄、朝山光子、川島真知子、串原国穂の各氏

日本の英語教育に望むこと

出席者

川道治雄	日本鋼管勤務
寺師明治	日本航空勤務
川島真知子	東京銀行勤務
朝山光子	服部時計店勤務
串原国穂（司会）	ELEC主事

串原（司会） どうもお寒いところお集まり下さいましてありがとうございました。「日本の英語教育に望むこと」という題でこれからお話しいただくわけですけれども，まず初めに会社へお入りになって英語の力がどういう面で足りないか。あるいは，いま会社でどういう方面で英語の力が必要とされているか，というようなお話から始めていただきましょうか。

社会が必要とする英語力

寺師 高等学校を出てから会社へ入ったのですけれども，英語の力は読むほうはある程度あるみたいだと思っていたのですが，実はそうでもなかった。ぼくの場合は IBM の機械計算ばかりやっているのですが，manual が英語なのです。それを読みこなせないのです。必要なのですけれども力がない。まだ学校を出ただけではとてもだめなのです。

川島 会社に入って皆さんに学校で習ってきた英語の授業のことなどを聞いてみると，私が受けた学校の授業のほうがだいぶ厳しくやられたという気がするのです。それでも全然役に立たない。教科書的な英語というのは読んだり書いたりできますけれども，身の回りの簡単な単語が全然わからないのです。ほんとうに必要な生活に密着した単語，女の人ですからお野菜とか家庭の単語とか，そういうのを学校でおよそやりませんし，とにかく通用しないのです。仕事が電話の交換なのですが，今度アメリカとの海底ケーブルで直通でかかってくるのです。きまったワク内のことだけしゃべるのですけれどもそれでもやはりわからない。特に聞き取れない。仕事ですから聞き取れないと話にならないわけです。私なんか入社後5年ぐらいになりますが，やっとこのごろわかってきたのですけれども，まだまだ学校出たての人が，4 月に入って 11 月まで相当ありますが，すごく簡単なことで，毎日繰り返されていても全然わからない人が多いのです。

川道 私は大学を出て4年になりますけれども，4 年間の社会生活をして英語を使ったかと言われると，あまり使うような場面もなかった。どちらかというと4年間で英語とかドイツ語とか，語学は忘れたほうなんです。ただ，これからはほんとうに英語の力というものが必要ではないかということを痛切に感ずるのです。というのは，ことし 7 月から3カ月間，AISEC（国際経済商学生協会）という国際的な協会から，各国の交換留学生が来るのです。日本鋼管へもフィンランドから1人来たのです。その3カ月間私の会社でいろいろと実務を経験したのですけれども，そういうような世話を人事部でやらなければならない。それで私のほうの課に来たのですが，英会話といっても多少 ELEC で初歩的なことを勉強しただけでなかなかうまくいかない。ほんとうに片言で説明する。非常に語学ができなければいけないということを痛感したのです。いままでの英語の教育は中学で3年，高校で3年，大学で4年，10年間英語の勉強をしてなぜ話せないのかということで complex を感じます。フィンランドなんか母国語はありますけれども，小学校のときから教会とかそういうところに行って英語を勉強する。そういう点が日本ではなかなかできていない。ほんとうに意思が通じないということは根本的な問題になってきますね。私の会社はメーカーですから，輸出部とか営業とかは語学の力が必要なのですけれども，一般的に

は貿易会社とか銀行などに比べればあまり必要としないのですけれども，しかしそうはいってもこれから世界各国に輸出をふやすというような方針もありますし，そういうところでは従業員が各国の営業所に行ったりする機会が多いものですから，英語の力のついた人を厚くしていくという方針が会社にありますし，これからは私どもも必要になるのではないかと考えます。

朝山　直接私は会社においては必要ないのです。妹が学校で，日本赤十字の関係で向こうから高校2年生ぐらいの人が10何人，東南アジアに旅行して，たまたま日本に立ち寄るので家を貸して欲しい，1週間ばかり泊まりたいと頼まれてお引き受けしまして，その方が1週間いたわけですけれども，せっかく遠いところをいらしたのをいかに歓待してあげたらいいか考えました。態度で示すということももちろんですけれども，話さなければしょうがないというので一生懸命やったのですけれども，やればやるほど自分の英語の力のなさを感じさせられちゃって，ほんとうに情けなくなって。学校を出てからタッチしなかったので単語なんか忘れているのです。かえって妹のほうが現在やっているという強味からある程度わかるのです。

寺師　vocabulary　単語の力がまだ弱いのです。だから学校で習ったreaderとかそういうのを読み，理解するには十分かもしれないけれども，実際に社会に出て，実際に役立てようとするとき，まだ十分じゃない。

川島　それは私も感じます。教科書に出てくるひととおりしかわからないのです。同じ単語にいろいろな，もっとほかの言い回しというのがありますね。そういうのを全然知らないのです。1つ覚えるとそれきりしか知らないのです。もっと私たちが理解し得るやさしいやり方で，もっと簡単であったというのがずいぶん感じます。

寺師　ELECへ来て，先生方が言われるとハッとするのですね。こんなやさしい言い回しがあったと思って。なかなかそういうことができなくてかたい言い方をする。

朝山　それから，むずかしい単語をずいぶん学校では習わされます。やはりふだん必要なことばを多くやったほうが，自分がしゃべるうえにおいて当然楽ですし，そういうむずかしいのはもう少し先の段階でやるようにして，そういう面ではもっとlevelを下げて，そして多く応用がきくようなやり方でやってほしいと思います。

それから中学1年生のときには，普通のhearingのときでも1番最初が肝心だと思うので，むしろ1番最初習うときに外人の先生とか，それに準ずるくらいの人の発音なんかを頭に入れて，そのあとは，もちろん教員の数というのは限られていますし，いまからパッとやっても無理ですけれども，英語というものはそういうふうにしゃべるものだということを初めに頭に入れたほうがいいのではないかしら。もちろんそのあとへ来た方がそれはまた問題になりますけれども，初めから日本人の先生に習ってそういうものだと思っていると，きれいに1つ1つ分けて話すという言い方しか自分でしなくなるのですね。そしてある日突然にこういうところへ来て，外人がしゃべっていると同じことを聞いても，頭でわかっても出てくるものはそういうわけにはいきませんね。

川道　ELECへ来て1番いいと思ったのは，直接外人のなまのことばが聞けてこちらも話すことができるということ。それまでは外人に対する何か1つの違和感みたいなものがあったような気がするのです。それが入り込めるという気がする。ぼくは第1印象はそうです。

寺師　確かにそうです。いままで聞いたという経験がない。それが実際にすぐそばで言っていただいて，最初のうちは全然わからなかったのです。それがもうすぐ1年になるのですけれども，いまになってようやくわかり始めたという感じです。確かにその点，ELECへ来てよかったと思っています。実際に耳に聞いたということですね。

川道　こちらの学校へ来ると，どちらかというと普通一般の英会話学校ですと話す力がつくような気がしますけれども，こちらは聞いてそれを反復して覚えていくというような感じなのです。ですから話す力というのはなかなか出来ないような感じがするのですけれども，ただしその一方，聞く力はついてくるわけです。自分で意識しないでついてくるわけです。その時間中は全部英語でしょう。そういう点もいい。

それからもう1つ，非常に短い文章で繰り返し繰り返し聞くでしょう。それから実際にわれわれが外人と話すときに短い文章が出てくる。

学校教育における英語

川島　私たちがいまELECで習っているような形式が中学や高校に取り入れられないものかしらと思う。だいぶ違うような気がします。こういう形でしたらついていけるのではないかしらと思うのです。中学で初めて英語をやるときに，最初に習うときにつまらないと，あと6年間というのは英語に興味を示さなくなる。ほんとうに好きな人で，自分でやろうという気の起きた人は一生懸命やるでしょうし，それだけ伸びるかもしれませんけれども，最初にいやだと思ったらそれきり6年間苦労しなければならないと思うのです。ですから最初がすごく肝心です。こういう形で何とかもっていけないものかしら。

寺師　ELECでやっているようなやり方で，まだ記憶力に富んでいるころにやっていただいたらだいぶ力が伸びると思います。

串原　ELECではこの方法で中・高の先生方を再教育しているのですけれども，し始めたのはすでに8年前なのです。ですから，8年前だとすると，皆さん中学か高校にいらっしゃったかもしれません。そのころからこういう方法は日本で進んだ学校では取り入れられていたわけですけれども，不幸にして皆さんのいらっしゃった学校ではそうじゃなかったということです。

ELECでは皆さんからいま御希望が出たような，こういう方法で中学あるいは高校で英語の授業を進めてもらおうということで夏期講習会をやっいるわけですが，改革というのはなかなか簡単にはいかない。遅々としてはいますけれども，だいぶよくなりつつあるのではないかと思います。

川島　私，高校時代の英語の授業で印象に残っているのは，毎日始まる前に5分間くらい test があった。単語の書き取りで，自分で spell を書くのと，それから先生が spell を書いて黒板に出された意味を書くのと2とおりあるのです。それは単語だけなのです。そういうことを一生懸命やって，みんな必死になって暗記するのですけれども，終わるとすぐ忘れちゃう。文章とつながって覚えない。だからそういう思い出みたいものばかり強くてちっとも楽しくなかった。

朝山　私もそうです。単語だけというのは結局使えないのです。そのことば1つの意味だけしか覚えていないで，実際使うというときにどういう形にして文章に入れたらいいかということがわからない。だからいやでした。

川道　語学に関する教育ですけれども，語学教育の目標をどの辺に置いているのかというのがちょっとわからないのです。いまの中学，高校，大学でも，結局読解力しかないのですね。作文力というのは高校へ進むときの入学試験があるからやるだけで，教育の方針がどういうところにあるのかわからない。ぼく個人の意見ですけれども，そういう文章を読む読解力と，もう1つは作文，平易な文章でいいから手紙ぐらい書けるとか，あるいは外人が話していることを知る，それから自分が話せるというぐらいでなければほんとうに語学をやったということにならない。ただ，読解力というのはあやしいのですね。ほんとうに平易な文章を読んで書いて話ができる，そこまでいかないとほんとうに語学の教育をやったということにならない。そういう方面にいまいきつつあるのかしりませんけれども，どうなんでしょうか。

串原　hearing, speaking, reading, writing この4技能を平均して伸ばすということが中等教育の基本なんですけれども。

川道　それにしても，たとえば私の中学，高校では hearing はあまりやらなかったし，会話もやらなかった。結局先生から文法的なこととか，小説読んだり，教科書読んだり，そういうことぐらいしかやらなかった。

串原　文法的な知識は皆さんずいぶんお持ちでしょう。

寺師　ずいぶんあやしいですね。その文法なのですけれども，どうも文法というのが，たとえば英語を読むときには読むのを助ける方向の文法，助けるための文法を学ばなければならない。文法のための文法というか，たとえば中学生のころ，品詞の名前を一生懸命覚えるとか，すべての単語を品詞分類してみるとか，文法のための文法という傾向は多分にありました。

川道　文法のための文法ということでちょっと最近気がついたことは，たとえば，tag question で I'm…… に対しては何と言うのか。それがわれわれいままで全然気がつかなかったのですけれども，先生はaren't I? と言うのです。そんな簡単なことがわからない。ほんとうに急所を突かれたという感じがしました。

串原　希望したいことは，文法というのは読んだり書いたりするための補助的なこととしてさっと触れるだけで，文法学者になるのじゃないから，そんな体系を教えんがために努力してくれなくてもいい。

朝山　それだけの時間をほかのほうに回したらもっとよくなると思います。聞くこととか書くこととかですね。

串原　ところで，先生方の発音はどうでしたか。

朝山　全然だめです。(笑い)　聞き取れるように言って下さいますけれども，それは結局外人が話しているような話し方ではなかったということです。だから結局よくないということですね。

川道　確かに発音の記号とかそういうものを正確に教えてくれるのですが，先生の言われるのは果たして外人に通ずるのかということになると非常に疑問です。

川島　その先生にずっと習っていると，ほかの先生のがわからない。その先生の言うことだったら少しぐらいはなれてわかっちゃう。ほかへいくとわからない。

朝山　それは外人でも人が違えばわからないということと同じですね。いろいろななまりもありますね。ですからその人の話は聞けても，発音のしかたがちょっと違うとわからない。だからいろいろな人のを聞かなければだめだということですか。

寺師　確かに発音の，たとえば th は舌をかむとか教えてくれるのは教えてくれるのですけれども，全然実際に訓練してくれなかったということ，drill がなかった。頭では f だったら唇をかむと知っているのですけれども，それが実際読みだすと全然なっていない発音になってしまう。

串原　それでちゃんと中・高を済ませてきた。

寺師　そうだと思うのです。

川道　適当にやっていればよろしいとなっちゃうんですね。日本人の先生の場合は確かによろしいと聞こえちゃうのでしょうね。外人の場合は通じない。

寺師　r と l にしてもしかりです。

朝山　やはり勉強するのはもっと厳しくやってほしいです。甘くやっていくと，それで正しいとは思わないけれども，するりと抜けられると思ってずるくなっちゃうと思うのです。ですからもっと厳しく，厳しくというのはこわくというのじゃなくて，学問に厳しく。

串原　drill を徹底的にやるということ。

川道　もう1つ，入試に hearing をやれと言いたい。そういう試験がないから，そういうことを無視して文法とか作文とか読解力ということばかりやっている。だから入学試験に会話とか hearing をやっていればいまごろ苦労しないけれども，会社に入ってからこっちへ来るというのは非常にエネルギーを消耗しますから，学校へ行ってい

るときにやっていれば非常に助かる。

川島　このごろ test に hearing をやっている学校がだいぶふえたと思いますけれども私も 1, 2 度そういう test を受けたことがありますけれども，やはりわかりませんでした。どうしてもやらなければならない状態ならみんなそういうふうにもっていくのじゃないかと思いますけれども。

串原　大学の入試問題なんかが変わると……。

寺師　そうですね，やはり努力のしかたが変わると思います。

朝山　やろうと思えばやれますね。

串原　そうすると，中学から ELEC でいまやっているような授業でずっと進めて高校までいったら，高校を終わったときは聞けるようになる。

川島　hearing は絶対だいじょうぶです。6 年間やってわからないというのが不思議なんです。

朝山　よく海外へいらして，環境がそうであると 1 年か 2 年でできるようになるといいますね。そういうことは結局環境で，いやでも耳に入るぎりぎりの状態にある。だからこういうふうに 1 時間の授業のうち全部が英語ですから，それにある程度近いと思うのです。

ELEC 英語講習会

串原　中・高の先生方には相当手厳しい批判が出されたわけですけれども，ELEC のいまの講習会に対する批判がありましたら出してもらいましょう。

先ほど川道さんから出てますけれども，いまの Institute の授業は hearing の力をつけるには非常にいい，しかし speaking の力をつけるにはまだちょっともの足りないのではないか，ということ。そして一般の英会話塾では speaking をよく drill するというようなお話だったのですが，どんな方法で……。

川道　あまり行ったことがないのです。

朝山　私は行ったのですけれども，free conversation といっても，ほんとうは何も話せないのです。だからこういう ELEC みたいなところで基礎的なことをやってからでないとだめだと思うんです。

寺師　感じとしては，最初 ELEC に入ったときは非常に厳しいところだと思ったのですけれども，それがなれてしまったというかちょっと厳しさがなくなったような感じです。やはり語学を習うには，本人のすごい努力と意志が必要だと思うのですけれども，厳しい環境が必要だと思うのです。上級にいるのですけれども，何かサロン的なというか，そういうムードになっているのです。そういうのじゃなく，もっと厳しさが欲しいような気がするのです。高い金を払っているのですからもっといじめてくれてけっこうです。

朝山　それから，今は教室での話ばかりですね。私は最下級ですから無理ですけれども，外人の家に入ってみて，向こうからいろいろなことを問われて，それに答えるような雰囲気もあったらいいなあと思うのです。そうすると思いつかないことばが家庭の中では出ると思うのです。もしたまたま招かれていって話す場合に，学校で習ったことと違うと思うのです。そういうときにパッと出るようなあれになったらいいと思います。そうしょっちゅうはできないことだと思いますけれども，そういうこともあったらと思います。

川道　少なくとも先生が生徒の名前ぐらいは覚えてほしい，ただほんとうに義務的に先生は教える，生徒は習いに行くという感じしかないのです。生徒同士もお互いにあまり関心がないようですし，非常に個人主義的な感じが強いのです。

朝山　そうですね。学校に来るときにでも先生とすれ違うときでも，1 言 "Good evening." と，こっちでも言っていいでしょうけれども，言って下さったらいいと思うときがあります。何かさっさっと行かれちゃうと習っている先生なのにとちょっと思います。

串原　そうすると，instructor の 1 人 1 人と personal な接触というものがもっとあってよいし，それとまた，classmates 同士の personal な関係を密にする必要があるということ。

朝山　教室の中ではすごくにこやかにやって下さいますけれども，ちょっと出るとそういうことがない。

串原　上級にいくと classmates 同士では知り合っているし，instructor とも……。

寺師　instructor とはそうではない。名前は覚えてくれるけれども，教室にいるときはいいですけれども，道で追いついても business-like というか，冷たい感じを持つのです。

朝山　帰りの時間は自由の時間になります。そうすると先生同士はすごく楽しそうに話していらっしゃるのです。そしてそばに 2, 3 人，友だち同士で帰るときにも，またそういうときの話というのは教室とは全然違った話がある。そういうときにできたら，なかなかむずかしいけれども，大変すばらしいと思います。また，そこまで要求するのはいけないかもしれないけれども，でも授業外でもそういう普通の話が聞けたらと思います。それこそ，それが目的なんじゃないですか。

学校に来ている間は外人の先生に接することができますが，外に出たらなかなかそういう機会がありませんね。知らない人に話しかけるのもいいけれども，すごく勇気が要りますし。だからせめて身近にいる外人の方と……。

寺師　そうですね。ぼく疑問に思うのですけれども，教室で先生方の話してくれることばは程度を落としていないか。それが実際外へ出て通用するものかどうか。たとえばしゃべって下さるのでも，それがわれわれにわかるようにかげんしているのではないかという……。外に出たときに実際に聞けて，少なくとも教室と同じぐらいにはわかるだろうかと思っているのです。どうでしょう。

串原　その御心配はないと思います。ELEC の instructor はすべて natural な speed でやっていますから。全然かげんしないことになっているのです。あれがわかっているのならあなたの力が相当伸びた証拠です。

（速記　上山栄子）

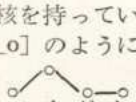
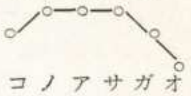
日英両語
音声の比較

国広哲弥

Ⅲ. アクセント

日本語のアクセントは，声の高低（即ち声帯の振動数の多少）によって区別される高低アクセントである。しかし，変化するのは高低だけであって，強弱（即ち声帯の振幅の大小）の点は全く無変化なのかというと，実はそうではない。土居光知博士著『日本音声の実験的研究』（岩波書店，昭和30年）に従うと，「音程が高い時には振幅は小さく，音程が低い時には振幅が大きくなる，換言すれば高低，大小が互に補足しあう，発声法は，真実の高低（pitch）アクセント型というべく，日本語の旧来の語調であって，今日でもすたれずに行われている（p. 16）」のである。なお，高低と強弱が平行している実験例も挙げてあるが，要するに両者は大ざっぱな意味で逆比例あるいは正比例という相関関係にあるわけである。このように両者が何時も同じ関係にはないということは，どちらか一方のみが有意味的（significant）で，従って音韻的だということである。今「麻」/'asa/という単語を例にとってみると，

の二通りの発音が見られる（○———○は高低，●———●は強弱を表わす）。そうすると二つの場合を通じて変らないのは高低の方であり，従って高低が音韻的に有意味であることが分かる。この点は我々の主観的反省とも一致している。今このような議論ができるのも，土居博士が一見博士の説に反するかに見える実験例も忠実に報告しておられるお蔭である。

東京方言などのアクセントでは，どの音節で高から低に移るかが問題であり，低音節の直前の高音節に「アクセント核」があるという。任意の単語の持つアクセントの型は，(1)アクセント核があるかないか，(2)あるとすればどの音節にあるかによって決定される。前述の「麻」は「が」を付けても［—a¯sa¯ŋa］となって高から低に移る所がないので，アクセント核を持っていないことになる。「朝顔」は［—a¯sa—ŋa_o］のようになり，［sa］にアクセント核がある。これを  のように表記することがあるが，実験結果を見ても分るように実際は のようになるので misleading である。前に「この」を付けて「この朝顔」とすると  のようになり，語頭の低は高に変ってしまうので，アクセント核のみを表示して /'asa˥ŋa'o/ とするのがよい。京阪式アクセントでは更に第3の条件「語頭は高で始まるか低で始まるか」が加わる。このほか，九州中部・南奥州・北関東などではアクセントの区別をしないし，隠岐島の一部・鳥取県の一部・東北の一部では［—te_nɯ_gɯ̈¯i］（手ぬぐい）のように一度下がって又上るアクセントが見られる。

英語のアクセントは強弱アクセントであるが，高低の点も変化する。大部分の場合両者は平行しているが，食い違うこともある。しかし同一の単語について見れば一定なのは強弱の方であり，これが音韻的に有意味である。日本語の場合は高低の方が単語と音韻的に結び付けられているため，いわゆるイントネーションは文末においてのみ問題となり，現在の所 /↗/，/↘/，/↘↗/ の三つが認められているが，英語では強弱の方が音韻的に単語と結び付けられたので，高低の方はかなりの活動の自由を与えられることになり，文全体にわたる多様な音調型を構成することになったのである。

日英両語において高低・強弱両方の変化が同時にあるわけであるが，やはり音韻的に有意味な方が顕著であるようである。強弱の変化が音韻的でない我々日本人としては，英語の発音に際して強弱の点が不充分になり易いのは当然である。アクセントの強弱は具体的には母音の明瞭とあいまい乃至は消失の差となって現われる。日本語では，一部で母音の無声化という現象はあるが，一般的に言って各母音は同じ明瞭度をもって発音されるので，ここに両語間で干渉の生じる要因があることが分る。我々は英語の発音に際しては強アクセントの母音は特に強く，弱アクセントの母音は特に弱く発音するように心掛けねばならない。品詞に則して言うならば，一般に弱く発音されるのは冠詞・前置詞・代名詞の所有格目的格・anomalous verb の大部分・接続詞などである。ELEC 著作の教科書 *New Approach to English* (2), p. 7 のテープ録音では 'in front of' が［ɪnfrəntəv］のように極く軽く発音されている。このように弱アクセントの母音は［ə］と表記されていることが多いが，初学者はこれを「ア」［a］と同じ発音にする傾向が強く，英語の実際とはかけ離れたものとなるので特に注意すべきである。

逆に英米人が日本語を発音する時は強弱アクセントを持ちこんでしまう。今 *New Approach to English* (2)（以下 *NATE* と略記）のテープ録音及び William L. Clark『アメリカ口語教本（初級用）』（研究社）（Clark と略記）のレコードから日本語を取り出してみると次のようになって

いる。

(1) ´◡´◡ (＝強弱強弱)

Nakamura [nà·kəmú·rɐ] (*NATE*, p. 5)

[ɐ] は [a] と [ə] の中間的な音。

Yokohama [jò:kəhú:mɐ] (*NATE*, p. 28)

Yamagata [jà:məgátə] (Clark, p. 145)

[ˇ] は有声化の記号。

samurai [sǽmurài] (Clark, p. 84)

(2) ´◡

Kanda [k'ǽndə] (*NATE*, p. 5)

mino [mí:noŭ] (Clark, p. 146)

(3) ´◡◡

Tanaka [t'ǽnəkə] (*NATE*, p. 4)

Haneda [hánedɐ] (*NATE*, p. 15)

(4) ◡´◡

Yamada [jəmá:dɐ] (*NATE*, p. 5)

Mieko [mɪéko] (*Ibid.*)

Tohoku [tɔ:hóku] (Clark, p. 145)

Kabuki [kəbú·ki] (Clark, p. 169)

Haneda, Mieko の場合は母音の音価はかなり日本語に近いが，Kanda, Yamada などの場合はアクセントの強弱によって母音の明瞭度に著しい相違を見せている。「ア」が [æ] と [ɑ:] の二通りに歪められているが，ここに現われた限りにおいては後に [n] が来る時に [æ] となっている。これらのアクセント型の基調をなしているのは強弱脚 (trochee)，強弱弱脚 (dactyl)，及び弱強脚 (iambus) であり，いずれも英詩の主要な韻律である。

次に英語の単語が四音節以上の場合は強弱が交代して現われようとする傾向があることに注意したい。

(1) 第一強勢が第三音節以後に現われる場合は，英米を通じて，その強勢のある音節から一つあるいは二つ以上おいて前の音節に第二強勢が現われると一般的に言える。

a) exàminátion, ìnstantáneous, mànufácture, etc.

b) intèlligibílity, intènsificátion, sìmplificátion, etc.

c) pàlatalizátion, nàtionalizátion, indùstrializátion, etc.

所が初学者はこの第二強勢を無視して，第一強勢のみに注意し，他の部分を平板に発音する傾向が強い。これは，日本語では一つの単語にアクセント核は一個のみであるという事実の干渉と考えられる。学習者に説明する場合もこのような根本的な干渉の原因にひと言触れるのは有効であると思われる。

(2) 第一強勢が第一あるいは第二音節に現われる場合，イギリス英語よりもアメリカ英語の方がその後に第二強勢を持っていることが多い。

	英	米
caterpillar	´ — — —	´ — ˋ —
criticism	´ — — —	´ — ˋ —
melancholy	´ — — —	´ — ˋ —
counterattack	´ — — ˋ	´ — — ˋ
capitalize	´ — — ˋ	´ — — ˋ

(Gimson)

administrative	— ´ — — —	— ´ — ˋ —
catholicism	— ´ — — —	— ´ — ˋ —
empiricism	— ´ — — —	— ´ — ˋ —

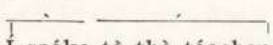
二つ以上の単語が何らかの統合型・文型によって結合される場合には更に強勢の種類が一つふえ，複雑さを増して来る。本誌 No. 12 に鈴木保昭氏がこの種のアクセント型について述べておられる。そこには六つの型が述べられているが，これらの型は私見によれば，実は幾つかの成層をなしているものが平面に投影された姿だと考えうる蓋然性がある。簡単な例を出すならば，次のような文がある。

Ì spóke tŏ thē téacher.

各々の単語は元来 / ´ / か/ˋ/ を持っていると仮定する。/ˋ/ を持つのは冠詞や前置詞などである。その上に強と弱の一対のアクセントからなる枠がかぶせられるとする。それで上の文は元来次のようであったとする。

Í spóke tò thè téacher.

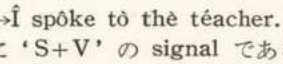
これに補語の signal である ⌐¬ が先ず加わる。/ˋ/ は単語の強勢を一段弱めるが/´/ は弱めもしなければ強めもしない。即ち



Ì spóke tò thè téacher.

⟶Î spóke tò thè téacher.

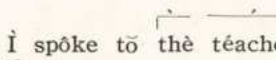
これに 'S+V' の signal である ⌐¬ 及び 'relation-axis' (cf. L. Bloomfield, *Language*, p. 194) の signal である ⌐¬ が加わる。



Ì spóke tò thè téacher.

⟶Ì spóke tŏ thè téacher.

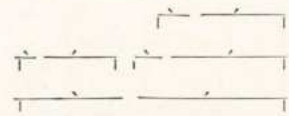
これに，'A+N' の signal として ⌐¬ が加わり



Ì spóke tŏ thè téacher.

⟶Ì spóke tŏ thē téacher.

となる。全体はまとめて次のように表わす。



III

II

I

Í spóke tò thè téacher.

⟶Ì spóke tŏ thē téacher.

この枠の加わり方は文の意味を反映しているわけである。このようにうまく行かない場合も多くなお研究を要する。

以上日英両語のアクセントについて概観して来たが，アクセントの質の相違は両国民の庶民的な音楽にも反映しているように思われる。日本の近代的編曲を加えない民謡にはリズムは殆どなく，専ら節廻しで聴かせる。一方英米の民謡ははっきりしたリズムを持っている。日本の詩歌が音節数は厳しい制限があるのはアクセントを問題にしていないこと，英詩が韻律を重要な要素にしていることもアクセントの質の相違に起因するものと考えられる。

日本語のアクセントの型は上に述べたように方言によって幾らか相違があるが，いずれも高低アクセントであって，筆者の観察した範囲内では英語発音への干渉の仕方には差異は認められない。

Ⅳ. 母　　体

我々が外国語の発音の正確さを求める場合，二つの段階が考えられる。その第一は音韻論的正確さである。原音と全く同じではなく，いわゆる「訛り」はあるが，少くともその外国語で区別されている音は正しく区別し，誤解を生じる恐れはない，というものである。第二は音声学的正確さである。音韻論的正確さをわきまえた上に原音そのままの音を再現できるものであり，「訛り」は消え，壁越しに聞けば本国人と変りないというものである。外国語教育の場では，最初から音声学的正確さを厳しく求めるのと，初めは音韻論的正確さで満足し，その次の段階で音声学的正確さに向かって磨きをかけるのとどちらが結局は早く目的を達成できるであろうか。筆者は後者の方法が実際的であろうと思う。

以下母音・子音の比較に際しても，この二つの段階の区別を念頭において行きたいと思う。先ず音素体系を比べて大体の見当をつけ，次に音声学的，換言すれば単音（phone）の段階で比較するという方法をとりたい。

先にアメリカ英語については Francis の本を参考にすると言ったが（本誌 No. 12, p. 24），それは音声学的な面においてであって，音韻論的な面では必ずしも従わない。Francis は Trager-Smith にならって nine-vowel system を採用している。しかしその中の /Ɨ/ については疑問の余地があるので，本稿では一応認めないことにする。日本語の方からは代表的なものとして五つの母音を持っている東京方言などの母音体系を選んで比べてみると次のようである。

アメリカ英語

/i/		/u/
/e/	/ə/	/o/
/æ/	/a/	/ɔ/

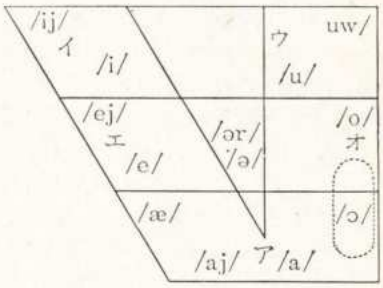
日本語

/i/		/u/
/e/		/o/
	/a/	

この種の枠は音素相互間の関係を明らかにするのが主な目的であるから，実際の音声を必ずしも忠実に反映してはいない。

上の図を見て先ず分かることは，日本語には /æ/ と /ə/ が欠けており，その発音が困難であろうということである。実際そうであり，両者の代りに /a/ を用いる傾向が極めて強いことは我々は経験からよく承知している。従って /æ/, /a/, /ə/ の三音を区別することが第一の仕事である。次に /o/ と /ɔ/ の問題であるが，この区別を認める必要のない方言もあるようであるが，Francis では区別されている。この人の発音では *more* は [mɔ·ə̯] / mɔhr / であるのに対して *floor* は [flo˞ə̯] / flohr / である。又 *board* が「食物」の意味では [bɔ·ə̯d] / bɔhrd / であり，「板」の意味では [boə̯d] / bohrd / である点が注意される。ELEC の教科書 *NATE* のテープ録音ではこの区別が明瞭でない人もあり，又はっきり区別されている人もある。明瞭に区別が聴き取れる例としては第2学年用 Lesson 4 がある。ここでは *four, course, sport* が [oə̯] で発音され，*ball, walked* などが [ɔ] で発音されている。Kenyon-Knott 発音辞典では前者の群の語に対して [o] と [ɔ] の二通りの発音を示している。

英語では単純母音の場合と次に /y/ 又は /w/ が付いて二重母音となる場合では音声がかなり違って来るものが多いので，二重母音も同列に並べて比較するのがよいと思う。そこでこれら全てを一所にして母音四辺形によってその概略の調音位置を示してみると次のようになる。図が複雑になるのを避けて二重母音はその出発点だけを示し，小さな異音的なゆれも無視することにする。



一般的に，母音は語末及び有声子音の前では長く，無声子音の前では短かい。

各音素表記の異音の主なものを音声記号で示せば次のようである。

/ij/ : [iː] [ɪi̯] [i].

「イ」/i/ : [i˞] ([˞] は低い変種を示す)

/i/ : [ɪ] 'lax' である点に注意。

[ɨ̞] *sister*. 実例は *NATE* (1), p. 37.

[ʉ] *children, milk*.

[ɨ̃] *bin*.

/ej/ : [ɛɪ̯] [ei̯] [eː]. *NATE* (2), p. 14, l. 11 の *eight* では [e·] である。

「エ」/e/ : [e˞]

/e/ : [ɛ], [ɛ̃] *men*.

/æ/ : [æ] [æə̯]. この音素について注意すべきは /æw/ の形でよく現われることである。日本の英語教育ではこれを認めておらず *NATE* でも発音表記は [au] で統一されている。所がこの教科書のテープ録音ではしばしば [æʊ̯] が現われる。例えば (1) p. 71 最下行の *down*, (2) p. 10, l. 5 の *now*, (2) p. 20, l. 5 の *house*, 同じページの l. 10 の *found* などである。他の語学レコードでも同様である。Kurath & Mc David, *The Pronunciation of English in the*

Atlantic States によればこの発音は大西洋岸の殆ど全域に散在している。教育的には /æw/ を奨める必要はなない。何故ならこれと類似の発音はロンドンの Cockney, Australia, New Zealand などの方言の特徴であり，英国人には substandard に響くだろうと考えられるからである。しかしアメリカでは事情が異なり，substandard ではないようである。少くともこの発音をアメリカ人の口から聞いた時奇異な感じを持たないように準備しておく必要があるであろう。

/aj/ : [aɪ̯] [ɐɪ̯] [ɑˑɪ̯] [ɑe̯]

「ア」/a/ : [aˡ]; 「輪を」では [wɑo], 「鮭」では [ʃake] (服部四郎博士『音声学』§ 7. 3. 1. 参照)。

/a/ : [ɑ].

/ɔ/ : [ɔ] [ɒ]. [ɒ] はオよりもむしろアに似て響く。実例は *NATE* (2), p. 14, l. 14 の *talked*, p. 19, l. 6 の *saw* などに明瞭に聞かれる。

「オ」/o/ : [oˤ]

/u/ : [ʊ]

「ウ」/u/ : [ɯ]. 唇の円めが殆どない点に特に注意。軟口蓋音の後ではずっと前寄りになって [ɯ̟] となる。NHK-TVの夕方五時四十五分から始まる子供番組「ひょっこりひょうたん島」のテーマ・ソングの中の「…どこへ行く——」の「ク」にこの前寄りの [ɯ̟] が極めて明瞭に聞かれる。

/uw/ : [u] [ʊu̯] [ʊˡu̯] ([ˡ] は前寄りの変種を表わす)。最後の異音は *NATE* (1), p. 33, l. 11 の *do*, l. 13 の *blue* に見られる。

/ə/ : [ə] [əˡ] [ɨ] (狭い異音はアクセントの弱い位置で現われる。)

/ər/ : [ɚ]. いわゆる反転母音で，日本人には苦手な音である。舌先を反転させないで舌の中部を盛り上げても類似の音を発することができる。

以上で大体各音素の実体が分った。次の仕事は日本人の立場からどこに発音上の干渉が生じるかを見て行くことである。上に触れた音節構造及びアクセントの場合は文字の面にはっきり現われないものであったので一元的に考察すればよかったが，母音・子音では文字が関係して来るので，文字による干渉を考慮に入れなければならない。[1] これは聴き取る際の聴覚的な干渉とは必ずしも一致しないことがありうる。従ってこの二種類の干渉の仕方を区別する必要がある。

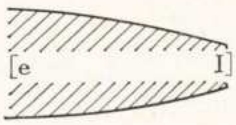
(1) /ij/ [iɪ̯] [i] / /i/ [ɪ] } イ [i] { [iː] / [i]

この干渉には二つの段階が考えられる。第一に /ij/ と /i/ がイに引き寄せられる点（略して「引きつけ作用」）と，第二に原音に見られた音色の差が日本語で長さの差に置き換えられている点（略して「置き換え作用」）である。米語においても異音内部には長短の差があるが音素的には無意味である。/ij/ と /i/ の間には実際に相対的な長さの差があるという測定報告もある（服部『音声学』§ 1. 2.）が，いずれにしても長さの差だけで区別されているのではないし，日本語の母音の長短の差よりは小さいものであるから，この置き換えには注意すべきである。[2]

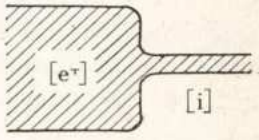
聴覚的干渉の点では /i/ はエに引きつけられる可能性がある。耳からはいった英語借入語にその例が見られる。例えば /stik/ : ステッキ，/kíčin/ : ケッチン（渡米一世などの用語）。

(2) /ej/ [eɪ̯] [eː] / /e/ [ɛ] } エ [eˤ] { [eˤː] [ei] / [eˤ]

(1)の場合と大体同じ干渉が見られる。ただ/ej/ が受ける置き換え作用は二通りありうる。一つは長さの差に還元されるもの，もう一つは [eɪ̯] という二重母音を [ei] / e'i / という二音節に相当する二つの独立した母音の接続したものに置き換えるものである。これは東京方言などには二重母音の [eɪ̯] / eɹ / が存在しないためである。これは両語の音節構造の相違による干渉とも見ることができる。図解すれば次のようになる。



米 語



日本語

もっとも二重母音の [eɪ̯] / eɹ / を持っている日本語の方言[3] ではこの置き換えはあるまいと考えられるが確認していない。

聴覚的干渉としては /æ/ [æ] がエに引きつけられる可能性がある。例 /kǽbin/ : ケビン。

(p. 37 へつづく)

注 1) スペイン語を母語とする人が英語を発音する時，文字に現われる全ての 'r' を [ɾ̃] (舌先ふるえ音) で発音する傾向があるのも文字の干渉と考えられる。又服部先生のお話によると，ロシア出身の Roman Jakobson 教授は 'first' を [fjəɾ̃st] のように発音するというのが，これも著しい文字の干渉の例である。

注 2) スペイン語のアクセントのある母音はそうでない母音よりもわずかに長く発音されるが，これは日本語の長母音で置き換えると長くなり過ぎてしまう。入門書では例えば *casa* は「笠」でよく「カーサ」と長く引っ張ってはいけないと特に注意している程である。

注 3) 金田一春彦監修『明解日本語アクセント辞典』(三省堂，昭和33年) の裏表紙見返しの地図参照。

■前号に下記の誤りがありました。お詫びして訂正します。

	(誤)		(正)
表紙目次	国広 哲也	⟶	国広 哲弥
p. 24 左3行目	〃		〃
p. 24 右30行	w/in evn.	⟶	/w/ in env.
p. 25 左9行	CV/(M)		CV (M)
p. 25 右8行	[dɔ́gẅɪz]		[dɔ́gɯ̈ɪz]
p. 25 右－3行	/kat'/		/katə'/
〃	/CVCVC/		/CVCVC/
p. 34 左1行	/kaˤta/		/kaˡta/
〃 5行	/kaQˤtaR/		/kaQˡtaR/
〃 －3行	/toˤki/		/toˡki/

外国語としての英語教育

——欧米を視察して——

松下幸夫

私は，昨年（1964年）2月上旬から7月末まで約半年にわたって，アメリカ及びイギリス各地の大学その他の教育機関を訪ねて，外国語としての英語の教授法について視察・研究をしてきた。以下その情況について述べ，特にわが国の英語教育に関係の深いいくつかの問題について私見を加えたいと思う。

ちなみに，今回の主な訪問先は次のとおりである（訪問した順序に列挙する）。

1. East-West Center, University of Hawaii
2. San Francisco State College
3. University of California at Los Angeles
4. University of Texas
5. University of Illinois
6. National Council for the Teachers of English
7. University of Wisconsin-Milwaukee
8. Indiana University
9. University of Michigan
10. Conference on Teaching of English to the Speakers of Other Languages (TESOL), Tuscon, Arizona (held on May 8-9, 1964)
11. Columbia University, New York
12. New York University
13. Georgetown University, Washington, D. C.
14. Center for Applied Linguistics, Washington D. C.
15. Office of TOEFL (Testing of English as a Foreign Language), Washington, D. C.
16. Foreign Service Institute, U. S. State Department, Washington, D. C.
17. Harvard University
18. Boston University
19. British Council—Headquarters, London
20. English Teaching Information Center, British Council, State House, London
21. Department of Educational Aids, British Council, State House, London
22. University of London
23. Davies's School of English for Foreign Students, London
24. Department of English as a Foreign Language, University of Edinburgh, Edinburgh, Scotland
25. Moray House College of Education, Edinburgh, Scotland
26. Department of English Literature, University of Leeds, Leeds, England

なお，これらの諸機関を訪問の後，6月中旬に London を立ち，次の各地をまわって7月末帰国した。

Copenhagen, Denmark ; Oslo, Norway ;
Stockholm, Sweden ; Helsinki, Finland ;
Berlin, Düsseldorf, Germany ;
Paris, France ; Zurich, Geneve, Switzerland ;
Rome, Italy ; Athens, Greece ;
New Delhi, India ; Hongkong.

これらの訪問先では，外国語教育の施設，特に Language Laboratory などを見，外国人学生に対する英語教育 English Language Institute の授業を観察，教授専門家の諸氏と英語教育について意見の交換をし，各種の会合にも列席した。そのことに関する詳細な報告は別の機会にゆずり，今回はこれらの視察研究を通じて特に強く感じたいくつかの問題について述べ，各機関における現状に関しては，その例証として引き合いに出す程度にとどめることにしたい。

今回の訪問で特に強く感じたことの第1は，Audio-Lingual Approach (Oral Approach) が外国語教育の正道と考えられていて，広く浸透していることである。そうして各地において，それぞれ事情は異っていても，いずれも相当な効果をあげていること。Audio-Lingual Approach (Oral Approach) の価値を再確認したことである。

第2は，Wide Use of audio-visual aids ということ。視聴覚教具が広く用いられており，その傾向がますます強まりつつあるということである。中でも Tape-recorder の利用，Language Laboratory の発達などである。Language Laboratory については，イギリスでは，まださほど広く活用されていないが，アメリカでは非常によく行きわたっていて，上記の各大学や教育機関では，ほとんど例外なしに，大なり小なりの Language Laboratory をもっている。

第3点は，イギリスとアメリカでは，外国語としての英語教育について，その考え方，方法などにおいて，それぞれ特異な傾向が見られること。しかし，それと同時に，一方では，協力して研究して行こうという動きも見られることである。

第4点は，われわれ日本人の英語についての反省である。これは海外で接した多くの日本人の自分自身の英語についての反省でもある。それはひと口にいうと「もっと Speed のある英語を」ということなのである。以下これらの点についてさらに検討して見ようと思う。

その第1は，外国語の学習は Audio-Lingual Approach (Oral Approach) でということである。「言語は，第1に，社会的コミュニケーションのための音声の体系である」という言語観に立つならば，それは極めて当然なことと考える。この考えが広く行きわたっていることを知って心強く感じたのである。

上記の各訪問先の Language Institute (語学研修所) においては，いずれも音声言語の習得ということを第1目標として教育が行われていた。このことは，これらの教育機関における学習者の目標が，その言語の直接使用ということにあるからでもあるが，最終の学習目標がたとえ文学の鑑賞にあろうと，知識の習得にあろうと，話しことばを理解し使用できるようになることを最初の goal とすることは当然のことでなければならない。このような情況はアメリカだけでなくイギリスにおいてもそうであった。

しかしどこにおいても問題が全くなかったというわけではない。たいていのところで Pattern practice が行われていたことは結構なことだが，教授者が必ずしも教材の扱い方，Pattern practice の方法を正しく理解していないと思われる場合にしばしば出会ったのは遺憾であった。例えば Pattern practice は speedy に行われなければならないのに極めて遅い運び方をしていたことなどその一例である。また教授者の資質という点でも問題が感じられたが，San Francisco State College や University of California at Los Angeles (UCLA) などでは，この点で全く申し分なく，学識も高く経験も豊かな教授の方々が直接指導にあたっておられた。

教材についてもかなり問題がある。Michigan の教科書は各地でかなり広く用いられている。これは，極めて基礎的なもので Drill 教材も Simple repetition のものが多い。Substitution Drill などが多い初学者向のものである。各地では，それぞれの必要に応じていろいろな教材で補っていたが市販のものは，同じような基礎的なものが多く，Intermidiate (中級)，Advanced (上級) レベルの教材に苦労している。Langauge Institute に入っている学生の多くは，日常生活に必要な会話だけでなく，大学での Lecture がわかるようになり，Discussion にも加われるようになり，Report も書けるようにならなければならない。そのためには Simple Drill を主とする初歩的な教材だけでは足りないことは明らかである。各所において，それぞれそうした Needs を満すためにいろいろな教材を作っているのが現状である。

このことに関連して思い起すことは，上記 Arizona 州の Tuscon 市において開催された TESOL (Teaching of English to the Speakers of Other Languages) という全米英語教育者会議のことである。この会議にはアメリカ各地から約600人の英語教育者が集り英語教育のあらゆる問題について2日間にわたって研究討議が行われた。それらの問題の1つに "Pattern Practice and Then What?" というのがあった。これはさらに2つの問題を含んでいた。その1つは上に述べたように，基礎的な教材の上に，Intermediate level のもの，Advanced level のものとしてはどんな教材がよいかということ。今1つは Pattern practice そのものについての検討で Substitution Drill のような Simple なものからはじめてどのように Drill を展開していったならば最も効果的に Oral Mastery が達成できるかということである。Fluency はどうしたら効果的に習得できるかということである。

第1については，各機関において実際に使用されているいろいろな教材の紹介，発表があり，

第2については Dialog drill についての発表があった。しかし聴衆を十分説得するに足るようなものが乏しかったのは残念であった。

第2点の Pattern practice の展開についてこの会でも一部には，substitution Drill のような simple repetition drill がそのすべてであるという誤解が見られた。しかし Pattern practice はそのような simple repetition drill よりも transformational な drill, selection drill が大切であるというのがその結論であった。Fries もいっているように，Pattern practice は Mim-mem presentation から Pupil-pupil dialog にいたるまでの橋渡しの働きをするものであり，自由に dialog ができるようにする中間の練習なのである。ただ Fries や Lado の著書には，Pattern practice からどのようにして Pupil-pupil Dialog にまで展開させたらよいのか，そのような technique 上の具体的例示がないのは遺憾なことである。Oral drill を simple なものから次第により complex なものに Organize することは大切なことである。Drill の体系化ということが考えられなければならぬと思う。

アメリカの各大学等にある Language Institute では多くの場合基礎的 drill にとどまっているようであって，Language Institute での練習で fluency に達しているというよりも，むしろ学校外での英語の実地使用によって fluency が習得されているというのが実状である。Institute での基礎的 Drill は，従って矯正ということにより多く役立っているようである。わが国における英語教育においては，学校外において英語で生活するというような環境におかれてはいないのだから，学校において，徹底した，体系的な練習が行わなければならない。

さらに fluency の達成ということについて，University of Michigan の Pike 教授のいっている "Nucleation" という考え方は，傾聴に価すると思う。これは同大学の English Language Institute の Acting Director である Edward Anthony 教授から聞いたことである。外国語が話せるようになるには，ある一定の時期にきて，その外国

語を話さなければならないような社会的圧力が加わることが必要であるというのである。社会的圧力が加わると，その時から急速に話せるようになる。fluent になり始めるというのである。これを化学上の述語を借用して Pike 教授は "Nucleation" と呼ぶのである。Nucleation というのは，例えば気体の湿度をだんだん増していくと，ついにある一定のところで飽和点に達する。その時から気体の液化が始まり，湿度がそれ以上増すとどんどん液化していく。また化学溶液が一定の濃度に達すると，その時突然凝固が始まる。こうした化学現象と同じように外国語の学習においてもある一定の時期に達すると，その時から急に話せるようになる。そのきっかけとなるのが社会的圧力であるというのである。だから練習は Social Context（社会的文脈）の中で行うことが必要だというのである。

第2の問題に入る前に上記各教育機関のうち感心した成功例のいくつかをあげておきたい。

その1つは，San Francisco State College における language program である。

ここではいろいろな program の中に Dr. Womack の担当している Course で Congolese program というのがある。これは10名内外の Congo からの若い留学生を対象とするものである。Spoken English, Linguistics などを習い，さらに Practice Teaching などをやっていた。生徒はいずれも20代の若い学生である。おそらく Congo に帰れば，指導的地位につく人達であろう。Linguistics の授業と Practice Teaching とがよく integrate されていた。

また University of California at Los Angeles (UCLA) では Clifford Prator 教授を中心として，外国人学生に対する英語教育において，非常な効果をあげている。これは教授者の資質，学識経験の高いことによると共にまた Program が非常によいからである。教室での授業と Language Laboratory での学習がよく integrate されていることなど特に感心したところである。

これらとは大いに趣は異なるが，今ひとつ参考になった所は，Washington 郊外にある Foreign Service Institute, State Department である。ここの Director は Mrs. Jordan といってとても上手に日本語を話す人である。女史が自身で著わした部厚い教科書を Text として使っていた。この Text は日本語を学習するためのものであるが，Pattern Drill にも Transformation Drill, Response Drill, Drill in Levels of Politeness などというのが入っているのが参考になる。ここの第1の特徴は，理想的に近い学習環境である。生徒は日本語を直ちに必要としている成人で極めて高い Motivation をもった人達である。私が参観したクラスでは生徒は3人で，若い日本人の女の先生が上記の Text で教えていた。生徒は1日8時間正規の授業をうけさらに3時間 Laboratory で勉強するという非常に intensive なものである。

さて，第2の点，Wide Use of Audio-visual Aids ということ。外国語の学習に視聴覚教具が広く用いられているということ。特にアメリカでは Language Laboratory が，上記の各大学その他の教育機関では，ほとんど例外なく設置されていることである。

視聴覚教具の広範な使用，特に聴覚教具の活用ということは，言語が音声言語を第1とするものであるということから，当然の発展とも考えられる。この点は，第1の Audio-Lingual Approach の問題とも互いに関連することである。また言語の習得には，反復練習が不可欠であるということからも，Language Laboratory の効用が認識されたからである。

各地の Language Laboratory を見て，共通してよいと思ったことをまずあげてみよう。

その1つは，アメリカではたいていのところでその管理運用が軌道にのっているという感じをうけたことである。これは，この国の Language Laboratory がすでに何年もの歴史を経て，経験を積んだ結果であろうと思われる。

第2には Tape 教材が豊富に揃えられていることである。

第3には教室における学習と Language Laboratory での学習との Co-ordination が比較的よくできていることである。

第4には Classroom Teacher が Language Laboratory のことをよく知っていることである。

これらの点は，いずれもわが国の場合にも留意しなければならないことがらである。

次に欠点と感じられたことのいくつかをあげよう。

第1は，機械の手入れの不足ということである。たいてい施設ができてから5・6年もたつと，どの機械も寿命がくるのである。今ちょうどそういう時期にきているところが多いわけである。その場合，予算があり，管理がよくできていると，修繕をしたり，取り替えを行うことによって更新できるので問題はないわけだ。しかし，性能が落ちてもそのまま無理して使用したり，こわれたまま修理・取り替えができていなかったりということがままあるものである。上記の各機関のうち案外大規模な Laboratory にそのような例を見うけたのである。

第2には，管理・指導の不徹底ということである。このこともまた大規模なものほど陥りやすい欠点である。小さな Laboratory の場合最小限の人数として Laboratory の Director と技術者とが常時1人ずつおれば指導にも管理にもさして問題はなかろう。けれども数百もの Booth をもつような大規模なところでは，その規模に応じて人員も増して，Integrate された管理が行われておればよいのだが，とかく人員を節約しすぎて，管理上無理をきたすことが起りがちである。このことは，機械化によって人員の節約をしようというアメリカの一般的傾向がわざわいしているのかも知れない。Language Laboratory の設置は決して人員の節約を意味するものではない。むしろ，それに伴って多くの人員増を必要とするのである。

この点で，遺憾ながら Michigan 大学の Language

Laboratory などその例にあてはまるのではないかと思う。ここの Laboratory は歴史も古く，いくつもの部屋と数百の Booth をもち，英語はもちろん，そのほかの数か国語の Program が同時に流れている相当大規模なものである。Laboratory はたしか3階にあったと思うが，機械室は地階にあって約100種類の Endless Tape が Automation 方式で動いている。私が観察した時には，わずか 3 名の Assistant が全体を管理していた。これでは非常な無理があると思った。係りの Assistant は人員の不足を訴えていた。たまたまある Booth に故障があったが，1人が地下室に降りて行き3階と地階で Interphone によって連絡するといった不便さであった。Dial 式の Booth もあったが，相当数がこわれたままであったのも遺憾であった。

第3には，Curriculum や Programing の不適当なこと。Classroom Activities との Coordination がうまくいっていないことなどである。例えば，前記の University of Michigan や University of Hawaii では，Language Laboratory が，英語の教室から遠く離れた Building にある。このような場合 Classroom activities と密着した Curriculum 運営ということは困難になってくる。いきおい教室での学習とは別個の Program を組むようになったり，Laboratory の時間は Classroom Teacher は開放されてしまう。従って Classroom activities と Laboratory activities が遊離してしまうことになりがちである。このようになってくると独立の Library のような運営にならざるを得ないようになってくる。そうなると非常に多くの Program を用意しなければならなくなるし，Library に匹敵する否それ以上の人員と資料を要することになる。経費の面でも非常に多額を要するようになる。

大規模の Laboratory の場合，このような困難が予想されるのである。そうして実際に観察した多くの大規模 Laboratory はうまく管理運営ができていると思われた例は極めてまれであった。

以上のことがらに関連して思い起すのは，UCLA (University of California at Los Angeles) の Clifford Prator 教授と話しあった時のことである。大いに共鳴した点は，要約すれば次のようである。

1. Language Laboratory は大規模なものを，いくつもの Department が共有するよりも，いくつかの小規模の Laboratory をそれぞれの Department が独立に持つ方がよい。

2. Curriculum に密着した Programing ができていること。

3. よい録音教材が豊富に用意されていること。

4. 教室での学習と Laboratory での学習の coordination がうまくできていること。このためには Classroom teacher も Laboratory のことをよく知っていなければならないこと。

5. 管理が十分であること。そのためには Laboratory 担当の教師と技術者との協力がうまくいっていなければならないことなどである。

事実 UCLA での Language program は，うまく組まれていた。Language Laboratory も彼の言の如く English Department 専用のものを持っていた。これは普通教室としても使えるように Booth の Screen は折畳み式になっていた。決して近代的な感じのものではないが，なかなかよく考えられたものであった。実際の授業も立派なものであった。

イギリスにおいては，Language Laboratory はアメリカほどまだ普及していない。

London の Hyde Park の近くに Davies's School of English for Foreign Students という語学校がある。これは小さな私立の学校である。British Council の係りの方に勧められて訪問したのであるが，こじんまりしているがなかなかよい教育が行われていた。ここにも Language Laboratory があるが，1部屋で10台ほどの小さなものである。しかし防音装置もよくできており，機械の管理もよくできていた。1時間の授業を30分ずつに区切って，初めの30分間は普通授業をしその時の Drill は Tape-recorder を Open で使って練習しておき，後半の30分は，同じ先生が隣室の Laboratory につれていって指導をしていた。学習活動の Coordination という点からいえば，まことによくできていると思った。

Department of Educational Aids というのが London の British Council にある。ここでは係りの Mr. Davis Sharrocks という人に会った。海外に出て英語を教えようという教師のために特に録音教材を研究・製作していた。Portable Tape-recorder をたずさえて，アフリカ等に出かけて教えるというわけなのである。大きな Language Laboratory のことや，大規模な機械化というようなことよりも，直ちに必要とされ，役に立つ地道な研究に取り組んでいた。いかにもイギリスらしいと思って感心したのであった。

Audio-visual Aids, Language Laboratory の普及は最近の著しい傾向であるが，これらの機械や器具を用いることによって音声言語の面でも Automated instruction が研究されていることも注目されることである。Programed Learning の音声言語の学習への適用である。この方面での Teaching machine の考案ということである。Harvard University の Behavior Science Department では John Carroll 教授の研究室で実験研究が行なわれている。ここで考案されているものは film slide と Tape-recorder を併用した自習装置である。学習者の学習活動に対して正・否の反応装置がついている。いわゆる reinforcement (強化) が行われるようなしくみになっている。もちろん生きた教師のように，自由に誤りの訂正や encouragement を与えることはできないけれども，このような装置とこれに match した適切な programing によって外国語の学習においても Automated learning が可能であることを証明している。

第3点として，アメリカ・イギリス両国における英語教育と比較してみると，考え方においても方法においても，それぞれ特異な傾向が見受けられる。

その第1は，アメリカでは機械化に対して極めて積極的であるが，これに反して，イギリスでは概して消極的であることである。Language Laboratory についても，アメリカでは広く普及しているが，イギリスではあまり普及していないばかりかむしろ地道な実際的な教具の研究により多くの関心が示されている。例えば Audio-visual aids といえばアメリカではもちろんわが国でもすぐ film, television, radio, tape-recorder, language laboratory などの機機のことを思いうかべるのは今やごくふつうのことだが，イギリスでは必ずしもそうでないようだ。University of London の某教授とAudio-visual aids について話した際のことを思い出すが，この教授はむしろ簡単な picture 集などに，より多くの関心をもっていた。また Leeds 大学では教育 Television の研究を始めているのを見たが，極めて幼稚なものであった。イギリスではいっぱんに機械に頼るということより実際的なものを好み，経験に頼るという type である。

さらにいっぱん的傾向として，アメリカでは，新しいものを好み，新しい理論などにすぐに飛びついていくという傾向が見られるのに対して，イギリスでは反対に，古いものを好み，新しい理論にすぐに飛びつくというような傾向は見られない。またアメリカ的なものには消極的であるばかりでなく時としては反ぱつ的でさえある。例えば言語学の方面でも，構造言語学や，Transformation Grammar などについても無関心な文法の先生が多いようである。

ところが反面，上にのべたことと反対の動きも一部にはある。イギリスではすべてが保守的で，アメリカと異ると決めてしまうことは当を得ないことであろう。例えば上にあげたような新しい言語学の研究家や学者もいることは事実である。新しい研究に取り組んでいる Group もある。アメリカとの学者の交流も行われている。

第4点は，われわれ日本人の英語についての反省である。海外で接した多くの人々が体験を通して言っていることは，早く話されるからわからないというのである。そうして自分のほうでもそんなに早く話せないというのである。これは，われわれ日本人にとって英語の学習が fluency という点で非常に困難であることを示している。これに反してヨーロッパの国々の人達，例えば Denmark や Sweden や Switzerland や Italy などの人々には英語を流暢に話す人が非常に多い。このことは，英語は彼等にとっては同じ語族に属しているため習いやすいからであろう。反対にわれわれ日本人にとっては，英語は日本語と全く語系語族が違っているために学習に handicap があるからであろう。日本人の発音は一語一語割合に正確に話しているのであるが Sentence 全体としての Rythm や Intonation が英語らしくない。例えば各語の強弱の区別がうまくできていない。Rythm が日本語式のいわゆる staccato になってしまう。Native speaker の英語がわからないというのも単に速いからというだけではなく語と語の切れ目がわからないからという場合が多いようである。このようなことを考えると，わが国の英語教育において音声面の指導について大きな反省がなされなければならないと思う。いわゆるカブセ音素といわれる stress, pitch, juncture といった面の指導がおろそかにされていた。これらは日本人の発音上の弱点となっているところである。このような弱点こそ重点的に指導されなければならないのではないか。

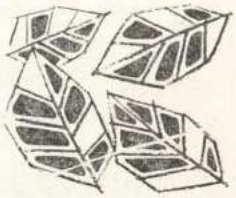
さらにまた相手の発話を理解し，自分の言いたいことがすらすら言えるようになるためには，英語の grammatical structure を身につけなければならない。Natural speed で話された相手方の発話がすぐにわかり，自分でも Natural speed で言いたいことがすらすら言えるようになるまで徹底した練習が必要なのである。要するに Oral Approach に基づいた学習が徹底されなければならないのである。

今や Audio Visual Aids の発達により，録音 Tape などの利用によって日本人教師の手によってこのような指導が出来ることが明らかとなった。Native speaker の援助があればもちろんなおよいけれども，それがなくとも成果をあげることができるし，現にそのように立派な成果をあげているところもあるのである。

要するにわが国における英語教育は，外国におけるそれとは異っているとはいっても，外国語学習の本質から考えて，Audio-lLingua Approach (Oral Approach) に基づいたものでなければならないということをあらためて痛感させられたのである。

日英両語の Contrastive analysis に基づいて，よい教材を編纂しなければならないこと，言語学習の本質に基づいたさらにきめの細い指導技術の向上がはかられなければならないこと，Audio-visual aids の効果的利用が研究されなければならないこと，これらのことがらはわが国の英語教育の改善のために当面の重要課題であると思う。これらの課題の解決を通して我が国における英語教育の効果をいちじるしく高めて行くことができると信ずるのである。

(ELEC 主事)



John D. Spillum

And to think I lived almost a quarter of a century before learning I was born in the year of the wild boar! Well, better late than never! And there are many other things I've learned since my arrival in Japan some five years ago. Much of this acquired knowledge would have been absorbed living anywhere for five years of one's life, but a great part of it could only have been learned here.

I learned my *very* first lesson in a tiny town in the state of North Dakota, where I was born, in the United States of America. I don't remember what it was, but I suspect it had something to do with wet things, one way or the other.

Before I turned five years old, I had traveled by car to California and back twice and had learned at least two more lessons that I do remember. One was don't cross the street when you are told not to, because if you do, you will have to go to bed no matter what time of the day it is when you are caught. The second was don't mess with bees unless your prepared to get stung. I learned in later years that when you're prepared the odds are more likely to be in your favor. I'm afraid the lesson didn't stick very well though.

After high school and college (The University of North Dakota) I learned a funny thing about my home state of North Dakota. No one is ever very sure just where it is. Not only that, but most people are anxious to confess that you are the first person they have ever met from there. Now the widespread ignorance of North Dakota's geographical location would be easy enough to accept if the second point weren't so difficult to understand.

You see, as far as I know, about 90% of my old school friends are now living outside of North Dakota. If this is generally true of other age groups, and it seems to be, then there must be more people living around the world who are *from* North Dakota than there are living *in* North Dakota. Then why should it be so unusual to meet someone who is from North Dakota?!?

The only conclusion I have reached so far is that I'm the only one who admits to coming from North Dakota. Can you imagine that? Can you imagine why? No you can't, if you haven't been there. And for heaven's sakes, don't try to find out during the winter.

My next classroom was Korea. That's where the United States government decided they needed me when I entered the military service. And I'm happy to say that my two years in the army were not a complete loss! Not quite. It was there that, among other things, I learned the radio announcer's profession…or trade, if you prefer. And it was there that I taught my first English conversation class.

There are some who think that past experience as a radio announcer is an excellent qualification for an English conversation teacher. And who am I to disagree. This point has been discussed at length by several members of our ELEC teaching staff, with reference to the Far East Network which broadcasts here in Japan. The conclusions reached were most enthusiastically acclaimed and agreed upon.

On leaving Korea and the army and returning to my home, I learned that North Dakota had not

(Continued to p. 36)

Janet M. Callender

There are several little rhymes and jokes about Boston, my home town. Once I saw a map of the United States drawn from the Bostonian point of view. Boston constituted three fourths of the area, the rest of the country the remaining one fourth. "Boston is the hub of the universe" is a statement traditionally ascribed to Bostonians. Actually, Boston is a quiet, friendly town of unassuming people. You would enjoy living there.

It is some time since I have lived there, though, for after graduation from high school, I left and went to Detroit. Detroit is laid out with roads like a maze, rather in the shape of an eddy or whirlpool. Whether the city takes its personality from its plan or vice versa, I don't know. I was there for only a year. New York, where I spent the next five years, is quite different. It is a city in which one knows the heights and the depths, where you can go from slum to museum in a block or two, and from sublimity to madness in a breath. Its mood changes as the sun emerges from behind a cloud. I did three years of college work in New York, at Hunter College. It is a women's college, though at that time there were a few men roaming its corridors, too. The veterans were studying everywhere.

In 1951 I had an opportunity to come to Tokyo. Back in those days the third largest city in the world didn't seem quite as cheerful and sunny as it does now. People didn't have much money. The department stores were dreary, whitewashed places, their shelves meagerly stocked. People didn't have washing machines, refrigerators, telephones, cars or television sets. There was no T. V. anyway. Tokyo's citizens didn't go to movies much, but they read more books, and I think the students studied harder. I studied, too, and graduated in English Literature from the University of the Sacred Heart.

Things were getting better year by year. Housewives now took their washing machines for granted, and some of their husbands now spent Sunday afternoons taking their families driving, or polishing their cars. Houses began to burst with refrigerators and other electrical appliances, and there arose the problem of how to keep the children away from the T. V. set. I taught at various universities and schools, among them Yokohama National, Yokohama Municipal and Waseda Universities, and the YWCA Gakuin. I also taught at Seijo Gakuen University, and still do.

It was in the summer of 1958 that I was first associated with ELEC, being a trainer at the Summer Seminar on the Sophia University campus. In 1961 the ELEC Institute came into being, and I have been with it since then. Dozo yoroshiku.

(Continued from p. 35)

changed one iota, and neither had I. Three winter months of successful commercial radio announcing near my home taught me that radio announcing in winter in North Dakota is the equivalent of carrying on most any other business in winter in North Dakota.

It was then when my aunt died leaving me a million dollars that I decided to come to Tokyo. I've been here ever since, and I'm still learning.

(p. 29よりつづく)

(3)	/æ/ [æ] /a(j)/ [a] /a/ [ɑ] /ə/ [ə] /ər/ [ɚ]	ア [aᵗ]	[aᵗ] [jaᵗ] [aᵗi] /a'i/ [aᵗ:] [aᵗ] [aᵗ:] [aᵗ] [aᵗ:]

cat, gang など軟口蓋音が前に付く時はヤ [jaᵗ] に置き換える傾向がある。 又 [a͡i] を二音節の [ai] /a'i/ にする傾向にも注意すべきである。この項の米語音はいずれも長くなる場合にはかなり長いので，長母音による置き換えは余り問題にならず，専ら音色の差に注意すればよいであろう。

cup などに現われる強アクセントの /ə/ [ə] はイギリス英語では [ʌ] 乃至は [ä] が相当しているものであり，イギリスの場合よりは位置が高い点に注意したい。

弱アクセント音節及び二重母音の第二音としての [ə] を発音しようとする時にどうしても口が開き過ぎるのは日本人の非常に矯正しにくい癖である。既に触れたように [ə] という音声記号はア [a] を表わしているというような誤解も大きな原因である。recognize のようなアクセントが弱く，前後を軟口蓋音にはさまれたような場合に [ɨ] に近く高まる点にも注意したい。この [ə] は弱アクセントと結びついているものであるから，アクセントの面からも指導して行く必要がある。

聴き取りに際して /e/ [ɛ] と /æ/ [æ] の区別が充分に行なわれ難い傾向及び発音に際して /e/ がエよりも広い点を強調し過ぎて /æ/ との区別が曖昧になる傾向があることも注意しなければならない。(母音の項未完)

(島根大学助教授・ELEC 研究員)

ELEC 報告

昭和39年度上半期事業報告

自 昭和39年4月1日
至 昭和39年9月30日

I 事業の状況

1. 英語教育に関する研究

英語教育の進歩改善のためには，基礎的な学術研究が必要であり，本法人は日英両語の構造に関する根本的な研究と英語教育の方法の研究の重要性にかんがみ，本年4月から研究委員会を設けて，この分野における組織的な研究活動を開始した。

同委員会は服部四郎理事（東京大学教授）を委員長として，4月14日以来毎週1回ないし2回会合して日本語と英語の分析・比較研究を行なっている。そして，この研究活動のために研究員として次の3氏が委嘱された。

上村幸雄氏（国立国語研究所員）
長谷川欣佑氏（一橋大学講師）
国広哲弥氏（島根大学助教授）

なお，現在進行中の調査は，日本語と英語の構造上の差異に関する基礎的研究の一部であり，会合にあたっては，英語を母国語とする外国人を informant として参加せしめ，研究を進めている。（以下略）

2. 英語教員に対する専門的な講習会の開催

わが国の中学校および高等学校の英語科担当教員を対象とし，新しい言語学の理論に基づいた英語学習の指導理論と指導技術を体得させて，その資質の向上に役だたせることを目的として，1957年以来毎夏実施してきたELEC夏期講習会は，本年度でその第8年を迎えた。

1964年度ELEC夏期講習会のうち，ELECが主催する中央講習会は東京の2ヵ所，すなわち国際基督教大学と東洋英和女学院短期大学で開催した。また，地方の団体が主催して，ELECが講師派遣および技術的援助を行なってこれを援助し，または共催する地方講習会は旭川，川渡（宮城県），美山（福井県），静岡の4ヵ所で開催された。いずれも7月下旬から8月下旬にいたる期間中に10日ないし13日の会期で実施された。（中間省略）

中央および地方の各会場とも，ELECの事業にふさわしい内容の充実した講習が行なわれ，受講者の資質向上に資するところ大であったと信ぜられる。本年度夏期講習会の受講者は6会場を通じて732名で，ELEC夏期講習会開始以来の受講者累計は3,754名となった。（以下略）

3. 英語教員および会社員，公務員等に対する英語講習会の開催

(1) ELEC英語講習会（The ELEC Institute）

1961年4月，東洋英和女学院短期大学校舎の8教室を借受けて開始した常設のELEC英語講習会は，1964年4月をもってその第4年に入った。受講者は中学校および高等学校英語科教員のほか，会社員，公務員，学生，その他一般成人にわたっている。講習会の実施にあたっては，新しい言語学の理論に基づいた研修を行ない，ELECの重点事業の一つにふさわしいよう，たえず研究と工夫を重ね，国際的な活動に現に携わり，または将来携わらんとする人々のために，きわめて効果的な英語学習の機会を提供している。

本年度春期講習会は4月15日に始まり，受講者数は440名に達した。7月14，15日の両日にわたって春期講習会修了式を挙行し，350名に対し修了証書を授与した。また，秋期講習会は9月14日に始まり，受講者数は331名である。（以下略）

(2) フルブライト留学生のための特別英語講習会

在日合衆国教育委員会（フルブライト委員会）では，昨年度に次ぐ第2回の企画として，昭和39年夏フルブライト奨学金により米国に留学すべき日本人のうちの15名に対する6週間の集中英語講習会（an intensive English refresher course）の実施を依頼してきたので，本協議会ではこれに応じ，特別の研修課程を編成して，5月11日から6月19日にいたる期間国際文化会館の1室を会場としてこれを実施した。

この研修コースは，1週5日間，1日5時間とし，研修課目は，ELEC Institute 編教材 "English Conversation" および "Controlled Conversation", William L. Clark 著 "Spoken American Englisn", AFRS 放送録音テープ等を用いての pattern practice, pronunciation drill, conversation, composition, public speaking および毎日昼食時に受講者3名ずつと外人講師1名とが食事を共にしながら行なう mealtime conversation を内容とした。

講師にはELEC Instituteの講師 Miss Janet Callender, Clifford V. Harrington, John Mosher および Ernest A. Richter の4氏を当てた。

15名の受講者は25才から36才までの年令層の大学

助教授，講師，助手，大学院学生，牧師，博物館員，公務員等でその研究領域は，行政学，経済学，比較教育学，心理学，中国史，神学，人類学等にわたった。

4. 英語教育に関する資料の作成頒布

本期間中に本法人が作成し，または作成中の英語教育資料は以下の通りである。

(1) 中学校英語教科書 *New Approach to English* 3巻の改訂

昭和 41 年度から使用される本件教科書改訂版については，すでに昭和 37 年以来その準備を進めてきたが，38 年以来は ELEC 顧問 Professor Grant Taylor（ニューヨーク大学米語研究所長）の協力を得て，本格的な改訂作業を行ない，その第1巻と第2巻については本年5月，第3巻については6月出版元学研書籍から文部省へ検定出願の手続をとった。そして第1巻および第2巻については，7月 30 日検定合格の通知があった。（第 3 巻は 11 月 26 日検定合格の通知があった。）

(2) 同上教科書の教師用補助教材の作成作業

上記 *New Approach to English* 改訂版の教師用として 4 月以来 *Teachers' Guide* および *Teachers' Manual* の作成に着手している。

(3) 単行本「新しい英語教育」（再版）

昭和38年 7 月大修館より発行した山家主事執筆の本書の再版を，本年4月1日学習研究社から刊行した。

(4) 機関誌 *ELEC Bulletin* 第 11 号

7 月1日学習研究社より発行。高橋源次博士，服部四郎博士，Albert H. Marckwardt 博士その他による論文，記事，報告書等を掲載した。

5. 英語教育に関する研究に対する援助と助言

(1) ELEC 研究協力校に対する援助助言活動

本期間中下記の ELEC 研究協力校に対し，数次にわたり高橋専務理事，山家，松下，各主事において，英語教育に関する援助助言活動を行なった。

日本女子大学付属中学校
茨城県水海道市立水海道中学校
東京都江東区立第四砂町中学校

(2) 講師の派遣

英語教師によって組織されている全国各地の英語研究会等から講師の派遣を希望してきた場合は，つねにこれに応じて本法人より講師等を派遣する方針をとっているが，本期間中における講師派遣状況は次の通りであった。（省略）

6. その他目的を達成するために必要な事業（省略）

II 処務の概要（省略）

ELEC 英語研修所

ELEC 英語研修所は1月11日（月）から新築の ELEC 会館において授業を開始した。夜間部のコースは普通科前期，普通科後期，上級科前期，上級科後期，集中科前期の5つであり，週5日制の集中科前期を除いては，それぞれのコースとも週3日制（月・水・金）と週2日制（火・木）の2本建になっている。昼間部のコースは婦人講座（火・木）と本科（週5日制）の2つであるが，婦人講座は午前の組と午後の組の2つに分かれている。

主な教科は Pronunciation Drill, Pattern Practice, English Conversation, Controlled Conversation, Current Topics, Composition & Public Speaking, Reading & Summerizing, Free Conversation, Passages from the Bible, Passages form Shakespeare, Business English などである。

なお，4 月からは教員研修科，教員内地留学研修科，中学科，高校科などのコースが新設される予定である。

ELEC 人事往来

◇ELEC評議員　茅　誠司氏　文化勲章受賞
◇ELEC評議員　足立　正氏　勲一等瑞宝章受賞
◇ELEC評議員　石坂泰三氏　勲一等瑞宝章受賞
◇ELEC評議員　松田竹千代氏　勲一等瑞宝章受賞
◇ELEC理　事　森戸辰男氏　勲一等瑞宝章受賞
◇ELEC理　事　市河三喜氏　勲二等旭日重光章受賞
◇ELEC理　事　上代たの氏　勲三等宝冠章受賞
◇ELEC評議員　宇佐美洵氏　昭和39年12月17日日本銀行総裁に就任。
◇ELEC主　事　佐藤貞友氏　昭和40年1月1日付で ELEC 主事に就任。佐藤氏は昨年12月まで鳥取県八頭郡若桜町立若桜中学校教諭として勤務していた。

ブルブライト留学生（国際文化会館前で）

× × ×

ELEC Library 寄贈図書一覧

(1964. 10月～12月)

【寄贈者】	【図書名・著作者】
太田朗	現代アメリカ風物誌—太田朗
全英連	全英連会誌 1964, 第2号
日本留学生センター	*Study Overseas* 1964, Nos. 1～3
横浜中英研	会報 1964
研究社	英語青年1月号～10月号
研究社	現代英語教育5月号～12月号
大修館	英語教育 10月号～12月号
三省堂	英語教育 10月号～11月号
研究社	英語と英文学 91号～94号
長谷川欣佑	日本語文法試論—長谷川欣佑
関西学院大学英米文学会	英米文学 Vol. VIII, No. 2, August /1964
聖ミカエル学園	ミカエルだより No. 22, 1964 第3号
Information Center Service	*English Teaching Forum* Vol. 2, No. 2, 1964
Grant Taylor	*Index to Modern English*—Thomas Lee Crowell, Jr.

原稿募集

ELEC Bulletin は現場の声を歓迎します。

◇**ELEC Forum**……400字詰原稿用紙15枚以内
英語教育についての自由な意見，ELECに対する要望，批判，提案など。

◇**Idea Corner**……400字詰原稿用紙10枚以内
英語教育における技術上の new idea について。

◇**Reports & Articles**……400字詰原稿用紙20枚
現場における実践記録や研究論文など。

◇**Question Box**……用紙は自由
英語教育上の指導理論および指導技術について。原則として誌上解答する。

◇**研究会だより**……400字詰原稿用紙6枚以内
都道府県あるいは市郡単位の英語教育研究会（研究サークル）の組織と活動状況を紹介するもの。

締切日
特に設けない。（次号掲載分は配本後1月以内）

稿料
Question Box を除き，いずれも規定に従って稿料を呈します。

原稿送付先
東京都千代田区神田神保町3の8
英語教育協議会　Bulletin 編集係

♣ ELEC 同友会員募集 ♣

財団法人英語教育協議会（ELEC）は，下記要項により，ELEC 同友会の会員を募集しております。

目的
1. 近代言語学による新しい言語観と，それに基づく指導理論・指導技術の普及
2. 会員及びその属する学校（団体）に対する研究助成

主な事業
1. 機関誌 *ELEC Bulletin* の無償配布
2. ELEC との共催による講習会，講演会の開催
3. 支部の要請により，ELEC より講師等を派遣して，研究を助成する（旅費等は ELEC 負担）
4. その他目的を達成するに必要な事業

会費　年額100円。（4月1日から3月31日まで）

入会の方法　別紙申込書に必要事項を記入の上，会費を添えて下記に申し込んで下さい。折り返えし，領収証と会員証をお送りいたします。

東京都千代田区神田神保町3の8
ELEC 同友会本部
電話（261）9101，9102
振替口座　東京 11798

編集後記

◇待望久しかった ELEC 会館が落成した。ここを本拠とした事業活動はこの正月から活発に展開されている。1965年，それは ELEC にとっても，また日本の英語教育界にとっても記念すべき年になることを期待したい。

◇「十年一昔」ということばがあるが，1956年に日本英語教育研究委員会が創設されて以来，すでに10年を数えるに至った。速いものである。当時 ELEC が主唱した「日本の英語教育の改善」ということは現在にもそのまま当てはまるのではないか。月日の流れは速く，改善への道は長く，そしてはるかに続く。

◇本号では，「日本の英語教育に望むこと」と題して，ELEC の理事および評議員の方々からご意見をいただき，特集してみました。教育現場で活躍される先生方の日々の糧ともなり，前進への指標ともなることを期待します。なお座談会では，実社会で活躍されている若い20代の声を聞いてみました。短刀直入に出された手きびしい批判，かなり耳に痛く響くと思いますが，可愛い教え子の声としてお聞きいただければ幸いです。

◇連載予定の Grant Taylor 教授の論文 "Language Laboratory Learning" は都合により本号には載せられなかったことをお詫びします。次号（4月号）には必ず載せます。

◇次号の特集は「Reading の指導」を予定しております。お手元にこれに関する論文がありましたら2月20日までにお寄せいただければ幸せに存じます。　Q.Q

ELEC BULLETIN　第13号
定価　80円（送料20円）
昭和40年2月1日　発行
© 編集人　財団法人英語教育協議会
主幹　中島文雄
東京都千代田区神田神保町3の8
電話（261）9101，9102
発行人　古岡秀人
印刷人　山田三郎太
発行所　株式会社　学習研究社
東京都大田区上池上町264
電話東京（720）1111

ELEC

THE ENGLISH LANGUAGE EDUCATION COUNCIL, INC